

せんご遺跡
おんじひがし
隠地東遺跡

経営体育成基盤整備事業倭文東地区に伴う発掘調査 2

2006

津山市教育委員会



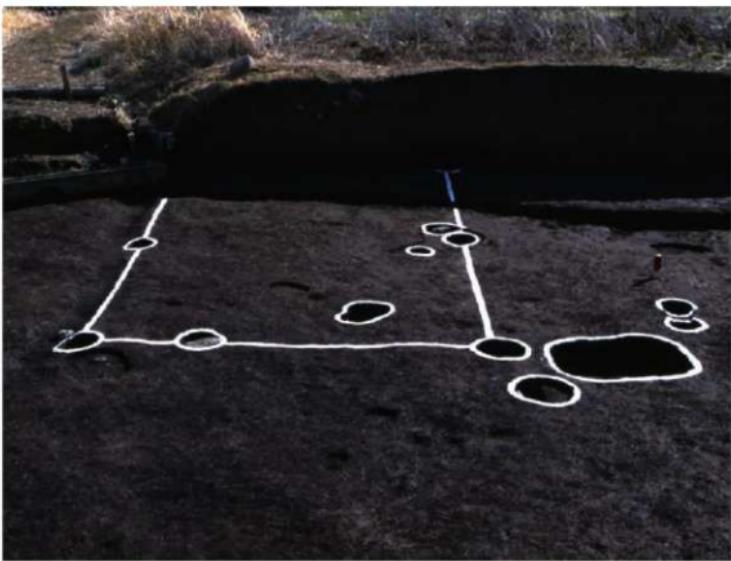
せんご遺跡13年度調査区（西半）（南東から）



せんご遺跡建物2棟出土状況（北から）



せんご遺跡 建物3 溝2 溝4 (南東から)



隨地東遺跡14年度調査区 建物 (北から)



陪地東遺跡15年度東調査区全景（南東から）（組み写真）



陪地東遺跡15年度東調査区 溝1 溝2（東から）



陪地東遺跡15年度西調査区溝1 溝2（北から）



出土遺物1（縄文土器・分鉢形土製品）



出土遺物2（土製紡錘車）



出土遺物3（石製品）

序

新津山市も合併後1年を経過し、漸く各地域の一体感が醸成されつつあります。

津山市の西に位置する久米地域においても、里山地域という位置づけのもとに、自然に恵まれた穏やかな環境や快適な住み心地を生かし、多様な動植物の生育・生息空間としての役割や自然とのふれあいの場の提供、多方面にわたる農地の有効活用など多くの役割が期待されています。

さて、本書は、県営は場整備事業の実施にともなう埋蔵文化財発掘調査として実施した、せんご遺跡ほか1遺跡の発掘調査報告書であります。この地域は、通称で倭文地区と呼ばれておりますが、その地区名「倭文」が示すように古い歴史を持ち、学問的にも、また文化財保護行政上においても著名な遺跡が多数点在する有数の遺跡密集地でもあるところです。

発掘調査は、平成14～15年に久米町教育委員会が担当して実施し、市町村合併による引継ぎ事業として、本年度津山市教育委員会において遺物等の整理作業を行なったのち、調査報告書の刊行をいたしましたものです。

本調査報告書は大変ささやかなものですが、今後の文化財の保存と研究の一助となることができれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり多大な協力やご指導をいただきました岡山県教育庁文化財課をはじめ、美作県民局その他の関係各位と、現地において発掘調査に従事いただいた作業員の方々に厚くお礼申し上げます。

平成18年3月31日

津山市教育委員会

教育長 神崎博彦

例　　言

- 1 本書は、経営体育成基盤整備事業（倭文東地区）の実施に伴い、旧久米町が旧岡山県津山地方振興局から委託を受けて全面発掘調査を実施したせんご遺跡ほか1遺跡の調査報告書である。本事業にかかる発掘調査報告は、基盤整備事業の工区（第1工区・第2工区）別に2分冊とし、本報告書はその第2分冊（第1工区分）に該当する。なお、第1分冊は久米町教育委員会によって作成、刊行済みである。
- 2 本報告書記載の2遺跡は、津山市（旧久米郡久米町）桑上・桑下地内に所在する。
- 3 発掘調査は、平成14～15年に旧久米町教育委員会が担当して実施した。
- 4 調査の実施にあたっては、事業担当課である岡山県津山地方振興局農林水産事業部耕地2課をはじめ、岡山県教育庁文化財課、真庭郡久世町教育委員会・久米町役場産業課（いずれも当時）及び地権者ほかの関係各位から多大な協力を得た。記して感謝の意を申し上げます。
- 5 調査報告書作成は、平成17年度事業として津山市教育委員会（弥生の里文化財センター）において行った。
- 6 本書にかかる発掘調査及び遺物等の整理作業、調査報告書の執筆は、津山市教育委員会職員（調査時は久米町教育委員会職員）仁木康治が担当した。
また、報告書の編集作業は、同職員平岡正宏が行なった。
- 7 遺跡名称については、調査時は久保田遺跡の名称で一括して取り扱ったが、岡山県遺跡地図の改訂（平成15年3月）に伴い、改訂後の遺跡名称を使用している。詳細については本文6・12ページを参照されたい。
- 8 出土遺物および図面等は、全て津山市久米歴史民俗資料館（津山市中北下127番地）において保管している。

凡　　例

- 1 本報告書に用いた高度値は海拔高である。また、方位は磁北である。
- 2 本報告書掲載の地形図は、旧久米町作成の1/10,000地形図を複製・加工・加筆したものである。
- 3 本報告書記載の遺構・遺物の縮尺は図示のとおりであるが、基本的に以下のとおりに統一している。

遺構	1/30・1/40・1/60	土器・土製品	1/2・1/4	石器・石製品	1/4
----	----------------	--------	---------	--------	-----
- 4 報告書掲載の遺物番号については、土器および土製品、石器・石製品、金属製品にわけて通し番号を付し、土器以外の遺物については番号の前に下記の記号を付している。なお、図番号及び観察表番号は前記の遺物番号に対応する。

石器・石製品	S	金属製品	M
--------	---	------	---
- 5 本報告書掲載の出土土器実測図のうち、中軸線左右が白抜きのものは、口径復元が小片のため不確実なものを示し、断面が黒塗りのものは須恵器を示す。

目 次

巻頭図版

序

例言・凡例

第1章 発掘調査の経緯	1
第1節 発掘調査に至る経緯と調査の概要.....	1
第2節 桑上・桑下地区の調査経過と調査体制.....	7
第2章 遺跡の位置と歴史的環境.....	11
第3章 試掘・確認調査	15
第1節 桑上地区（試掘調査）.....	15
第2節 桑下地区（確認調査）.....	21
第4章 せんご遺跡	29
第1節 遺跡の位置と調査の概要.....	29
第2節 遺構と遺物.....	31
第3節 遺構に伴わない遺物.....	38
第4節 小結.....	40
第5章 隠地東遺跡	41
第1節 遺跡の位置と調査の概要.....	41
第2節 遺構と遺物.....	43
第3節 遺構に伴わない遺物.....	60
第4節 小結.....	62
第6章 まとめ	63

図 目 次

第1章

第1図	津山市位置図	1
第2図	津山市行政区分図と調査位置図	1
第3図	は場整備事業区域図 (S=1/10,000)	2
第4図	2工区トレント位置図 (S=1/5,000)	4

第2章

第5図	周辺遺跡分布図 (S=1/20,000)	12
-----	----------------------	----

第3章

第6図	試掘調査トレント配置図 (S=1/5,000)	15
第7図	試掘調査トレント平・断面図 (1) (S=1/40)	18
第8図	試掘調査トレント平・断面図 (2) (S=1/40)	19
第9図	試掘調査トレント平・断面図 (3) (S=1/40)	20
第10図	確認調査トレント配置図 (S=1/5,000)	22
第11図	確認調査トレント平・断面図 (1) (S=1/40)	26
第12図	確認調査トレント平・断面図 (2) (S=1/40)	27
第13図	確認調査トレント平・断面図 (3) (S=1/40)	28

第4章

第14図	せんご遺跡調査区域図 (S=1/2,500)	29
第15図	年度別発掘調査区分図 (S=1/1,000)	30
第16図	せんご遺跡遺構配置図 (S=1/600)	30
第17図	建物1平・断面図 (S=1/60)	31
第18図	建物2平・断面図 (S=1/60)	32
第19図	建物3平・断面図 (S=1/80)	33
第20図	建物3出土遺物 (S=1/4)	34
第21図	土壤1平・断面図 (S=1/80)	34
第22図	土壤2平・断面図 (S=1/60)	34
第23図	土壤3平・断面図 (S=1/60)	34
第24図	土壤4平・断面図 (S=1/60)	35
第25図	土壤5平・断面図 (S=1/60)	35
第26図	土壤6平・断面図 (S=1/60)	35
第27図	土壤6出土遺物 (S=1/4)	35
第28図	土壤7平・断面図 (S=1/60)	35
第29図	溝1平面図 (S=1/60)・断面図 (S=1/40)	36
第30図	溝2・3平面図 (S=1/80)・断面図 (S=1/60)	37
第31図	溝3出土遺物 (S=1/4)	37
第32図	溝4平面図 (S=1/60)・断面図 (S=1/40)	37
第33図	遺構に伴わない遺物 (1) (S=1/2)	39
第34図	遺構に伴わない遺物 (2) (S=1/2)	40

第5章

第35図	隠地東遺跡調査区域図 (S=1/2500)	41
第36図	14年度調査区遺構配置図 (S=1/400)	42
第37図	建物 平・断面図 (S=1/60)	43
第38図	建物 出土遺物 (S=1/2)	43
第39図	土壤 1平・断面図 (S=1/30)	44
第40図	土壤 2平・断面図 (S=1/30)	44
第41図	土壤 2出土遺物 (S=1/4)	44
第42図	土壤 3平・断面図 (S=1/30)	45
第43図	土壤 4平・断面図 (S=1/30)	45
第44図	不明遺構平・断面図 (S=1/30)	45
第45図	15年度東調査区遺構配置図 (S=1/400)	46
第46図	建物 1平・断面図 (S=1/60)	47
第47図	建物 2平・断面図 (S=1/60)	47
第48図	土壤 平・断面図 (S=1/30)	48
第49図	溝 1・溝 2・道路状遺構平・断面図 (S=1/200) (S=1/80)	49
第50図	溝 1・溝 2・道路状遺構出土遺物 (S=1/4)	48
第51図	溝 3・溝 4平・断面図 (S=1/60)	50
第52図	溝 5平・断面図 (S=1/60)	51
第53図	溝 5出土遺物 (S=1/2)	50
第54図	溝 6平・断面図 (S=1/60) (S=1/40)	51
第55図	溝 7平・断面図 (S=1/60) (S=1/40)	52
第56図	溝 8平・断面図 (S=1/60) (S=1/40)	52
第57図	15年度西調査区遺構配置図 (S=1/400)	53
第58図	土壤 1平・断面図 (S=1/30)	53
第59図	土壤 2平・断面図 (S=1/30)	53
第60図	土壤 3平・断面図 (S=1/30)	54
第61図	土壤 4平・断面図 (S=1/30)	54
第62図	溝 1・溝 2平・断面図 (S=1/160) (S=1/80)	55
第63図	溝 1・溝 2出土遺物 (1) (S=1/4)	57
第64図	溝 1・溝 2出土遺物 (2) (S=1/4)	58
第65図	溝 1・溝 2出土遺物 (3) (S=1/4) (S=1/2)	59
第66図	ピット列平・断面図 (S=1/30)	60
第67図	方形ピット平・断面図 (S=1/80)	60
第69図	遺構に伴わない遺物 (1) (S=1/4) (S=1/2)	61
第70図	遺構に伴わない遺物 (2) (S=1/4)	62

表 目 次

表1 事業区域内の遺跡・発掘調査関連一覧表.....	6
表2 出土土器・土製品観察表.....	65

写 真 図 版 目 次

卷頭図版 1	せんご遺跡	13 年度調査区 西半全景
	せんご遺跡	建物 2 検出状況
卷頭図版 2	せんご遺跡	建物 3 溝 2 溝 4
	隠地東遺跡	14 年度調査区 建物
卷頭図版 3	隠地東遺跡	15 年度東調査区 全景
	隠地東遺跡	15 年度東調査区 溝 1 溝 2
卷頭図版 4	隠地東遺跡	15 年度西調査区 溝 1 溝 2
		出土遺物
卷頭図版 5		出土遺物

図版 1	せんご遺跡 遠景（北から）	図版 4	隠地東遺跡 15 年度東調査区
	土壤 1（南から）		土壤（東から）
	土壤 2（北から）		溝 3（東から）
	土壤 3（北から）		溝 4（北東から）
	土壤 4（北西から）		溝 5（北から）
	土壤 5（南から）		溝 6（東から）
	土壤 6（北から）		溝 7（北西から）
	土壤 7（南東から）		溝 8（南から）
図版 2	せんご遺跡 溝 2 溝 3（北西から）		調査状況（西から）
	溝 4（南東から）	図版 5	隠地東遺跡 15 年度西調査区
	せんご遺跡 出土遺物		全景（南から）
図版 3	隠地東遺跡 14 年度調査区		土壤 1（北東から）
	遠景（北西から）		土壤 2（西から）
	土壤 1（北東から）		土壤 3（北西から）
	土壤 2（北から）		土壤 4（北東から）
	土壤 3（西から）		方形ピット（北東から）
	土壤 4（北東から）	図版 6	隠地東遺跡 出土遺物（1）
	不明遺構（南西から）	図版 7	隠地東遺跡 出土遺物（2）
	3 区調査状況（南東から）		
	隠地東遺跡 15 年度東調査区		
	建物 1 建物 2（北から）		

第1章 発掘調査の経緯

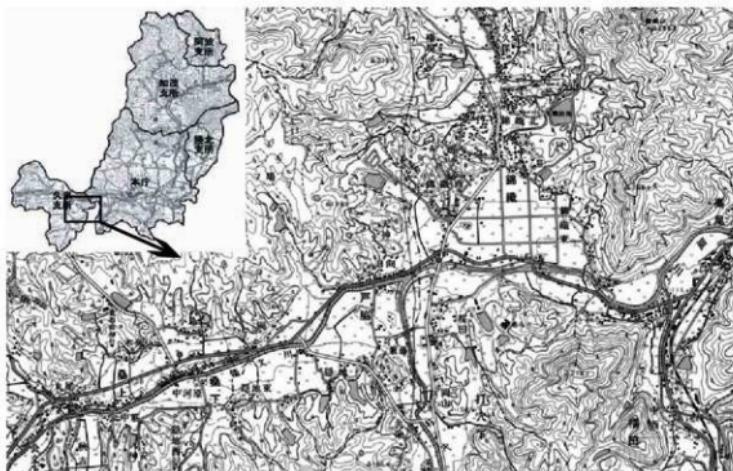
第1節 発掘調査に至る経緯と調査の概要

津山市は、岡山県北東部に位置する地方都市である。平成17年2月28日付けで津山市及び旧苦田郡加茂町、阿波村、旧勝田郡勝北町、旧久米郡久米町が合併し、現在の津山市の姿となった。

現市域の面積は506.36km²、人口111,149人（平成17年4月1日現在）である。地勢は、北は岡山・鳥取県境をなす標高1,000～1,200m級の山地から南に傾斜する地形を示し、南端ではいわゆる「津山盆地」と称する標高100～200mの盆地であり、南北に長い市域となっている。このような地理的条件から、気候についても北部、南部によって異なる。北部においては年平均気温11～12℃、年間降水量約2,500mmに対し、南部におい



第1図 津山市位置図



第2図 津山市行政区図と調査位置図



第3図 ほ場整備事業区域図 (S=1/10,000)

てはそれぞれ 13 ~ 14℃、約 1,500mm となりかなりの差異がみられる。現時点では、概ね旧津山市街地と周辺の農村地帯に分かれ、合併間もない時期であることから各地域の一体化の醸成及び均衡ある発展が期待されている。

久米地域は、現津山市のうち旧久米郡久米町域にあたり、吉井川以西の地域で、市の西端の位置にある。久米地域の基幹産業は農業であり、地区総面積 74.39 km²に対し、森林・原野面積が約 70% を占め、農用地は約 15.4% という土地利用形態である。

倭文東地区（桑上・桑下・戸脇地区）は、久米地域では南部に位置し、国道 429 号線及び倭文川を挟んで南北に広がる比較的開けた水田地帯である。これまでの営農形態は 10a 程度の小規模な機械営農が中心で、土地の利用形態も不整形かつ排水不良であり、加えて狭小で道水路に面していない水田が多く良好とはいえない状況であった。加えて、基幹作物の米以外の作物に対する土地利用が少ないうえ、基盤整備の遅れから土地の利用効率が低く、兼業農家が主体で扱い手の不足が進んでおり、生産性についても横ばいの傾向を示していた。

このような条件を改善するため、平成 11 年 6 月以降、桑上・桑下・戸脇地区を事業予定地とする県営は場整備事業（事業予定期間：平成 12 年度～平成 16 年度、事業予定面積 40.2ha）計画が具体化し、岡山県津山地方振興局から久米町産業課を通じて、久米町教育委員会（いずれも当時、以下同じ）に事業予定地における埋蔵文化財埋蔵地の有無についての照会があった。提示された事業計画の概略は、工事は桑上・桑下地区を第 1 工区、戸脇地区を第 2 工区と区分し、事業地区の東端である戸脇地区から工事実施予定であること、また、平成 12 年度は原則として設計および協議対象年度とするが、条件が整備されれば一部工事に着手したいというものであった。

上記の計画に対して、久米町教育委員会は岡山県教育文化課（当時：以下「県文化課」と略、以下同じ）と協議を行い、以下 2 点の指導を県文化課から受けた。その第 1 点は、事業計画の策定については事業担当課と充分な連絡をとって策定すること、第 2 点は、平成 10 年度に岡山県教育委員会により実施された県内遺跡詳細分布調査の成果から、計画区域については地形的に尾根の突端部分や河岸段丘上の微高地において遺物が採取されており、埋蔵文化財の所在が想定される。可能な限り早期に地形等の現状確認を含めた分布調査を実施し、遺跡の分布する可能性の高い範囲を絞り込んだうえで必要に応じて確認調査を実施することであった。

これを受けて、久米町教育委員会は、平成 12 年 3 月 24 日付け通知により開発事業に対する埋蔵文化財保護の調整・調査の対応について県及び市町村での役割分担の原則が改めて示されていたことから、本事業にかかる取り扱いについてもこれに準じて基本的に久米町で対応することとし、県文化課の指導を受けつつ、以後具体的な個別の文化財保護にかかる協議および調査事業を進めた。

以下、各工区別の概要について述べる。

2 工区（戸脇地区）

事前の協議において、事業予定区域については、分布調査の成果により周知の遺跡（遺物の散布地点：当時は遺跡名称なし⇒仮名）が確認されているが、その範囲については不明確であること、また、事業予定区域内の分布調査がほぼ未実施であり、地形等の条件から遺跡の分布する可能性があることを久米町教育委員会は事業部局に対して回答していた。

具体的な協議の着手後は、当初からの協議の経過から、工事順序の早い 2 工区（戸脇地区）から対応す



第4図 2工区トレーニング位置図 (S=1/5,000)

こととし、平成12年9月から10月中旬にかけて対象地区内の詳細分布調査を実施した。その結果、対象地区内のかなりの範囲において遺物の分布が顕著に認められることを確認し、確認調査が必須であることを事業担当部局に回答した。そして、分布調査の成果をもとに平成12年11月から平成13年3月にかけて国庫補助事業として久米町教育委員会が調査主体となり、文化課の指導を受けて確認調査（トレーニング数26本）を実施した結果、主に尾根および微高地を中心として遺跡が所在することが確認された。

確認された遺跡の取り扱いについては、確認調査の実施中から並行して保存協議を事業担当課と断続的に行い、極力現状での保存を要望したが、地形上および設計上の問題から切土となる部分については止むを得ず記録保存処置を講ずることで対応するという結論を得、全面発掘調査を実施することとなった。発掘調査期間は平成13年5月～6月、9月～12月である。

なお、以下試掘・確認調査全般にわたることであるが、本事業における試掘・確認調査におけるトレーニング位置の設定については、施工計画が示されていなかった前記2工区確認調査の前半を除き、切土部分の確認を重点的に行なうよう配置する等、極力工事計画を反映させるように設定している。

1工区（桑上・桑下地区）

第1工区における埋蔵文化財への対応は、ほ場整備事業区域の東端である2工区の発掘調査が実施中であった平成13年秋に1工区の施工順序が決定を見、一転して事業区域西端の桑上地区から施工することとなつたため、これに対する対応が必要となつたことから本格的となつた。

桑上地区的工事予定区域内には、これまで周知の埋蔵文化財包蔵地は確認されていなかつたが、周

辺の遺跡分布状況等から遺跡の所在する可能性が高いと判断されたため、取り急ぎ分布調査を実施することとし、2工区の発掘調査の合間を縫って休日対応で実施した。その結果、工区南端の尾根部分を中心に遺物の分布が確認され、このことから関係部局と協議のうえ急遽1班を編成し、試掘調査を実施することとなった。試掘調査については、幸いにして当該時期に他町村から専門職員の派遣を得たことから辛うじて対応することが可能となり、平成13年11月～平成14年1月にかけて実施した（トレンチ数14本）。

調査の結果、尾根部分において遺構が分布することが確認された。これに伴い、平成16年1月17日付けで津山地方振興局長から文化財保護法第57条6項に基づく遺跡発見通知（せんご遺跡）がなされた。本遺跡については、保存協議の結果、既に当該区画が一部施工済みでありは場区画計画について地元の了承を得ていることと、遺構の確認された位置が地形的に区域内の最高位に位置するため、設計変更に極めて困難を要することから、切土部分について止むを得ず発掘調査で対応することとなった。

この調査事業については、調査着手前の協議の時点で、調査期間について年度をまたがる形で平成14年2月～3月、4月～6月と設定し事業担当部局とも合意していた。ところが、平成14年度分の調査着手後に工事終了後の作付けの問題から工事期間の強い短縮要望が地権者より出され、その影響が発掘調査にも波及するところとなり、調査工期の短縮について事業部局から強い要望を受けた。これについては地権者の要望が原因であることから対応せざるを得ず、このため実際の調査期間は2月～3月、4月～5月上旬となった。

残る桑下地区については、周知の遺跡（隠地東遺跡・信藤池遺跡）が所在し、これらの遺跡の確認調査（トレンチ数28本）をせんご遺跡調査終了後実施した。分布調査は桑上地区の調査と並行してあらかじめ実施していたことから、桑上地区のまとめが一応の完了を見たのち、即時に着手した。確認調査期間は平成14年6月～11月である。

確認調査の結果、信藤池遺跡は工事区域内への分布が認められなかつたが、隠地東遺跡については遺跡が工事区域内に及ぶことが判明したため、前例と同様に保存協議の対象となつた。ここについても、施工計画との関係から発掘調査で対応せざるを得ず、切土部分について発掘調査を実施した。調査期間は桑上地区と同様に年度をまたがるかたちとなつたが、平成15年1月～3月、5月～10月にかけて実施し、以上をもって本事業にかかる発掘調査をすべて終了した。

なお、工事と遺跡名及び発掘調査事業との関係については第1表にまとめている。

経営体育成基盤整備事業及び関連文化財調査事業工程表

事業名	実施位置 年月	経営体育成基盤整備事業		事業担当部局		財田当償		事業期間	
		久保町 森上・森下・芦越	地内	清山地方振興局農林水産部	農業課	平成12年度	平成15年度	平成12年度	平成15年度
調査項目(測符名)		6	9	12	3	平成13年度 6	9	12	3
2工区地盤調査 久保田道路①				単独事業 (調査面積 A=300m ²)					
2工区 2-1工区発掘調査 曾根田道路				単独事業 (調査面積 A=1,200m ²)					
(戸塚地) 区) 半木大路 神田道路 久保田道路				受託事業 (調査面積 A=4,240m ²) 受託事業 (調査面積 A=1,175m ²) 受託事業 (調査面積 A=1,090m ²) 受託事業 (調査面積 A=1,975m ²)					
1-1工区試掘調査 1工区定期調査 定期地盤調査・信藤宅地調査② 1工区 (森上・ 森下地) 区) 1-4工区定期調査 定期地盤調査				単独事業 (調査面積 A=65m ²) 単独事業 (調査面積 A=295m ²) 受託事業 (調査面積 A=1,630m ²) 受託事業 (調査面積 A=3,570m ²) 受託事業 (調査面積 A=1,030m ²) 受託事業 (調査面積 A=2,540m ²)					

表1 事業区域内の遺跡・発掘調査関連一覧表

表1 調査実施時の測符名
表2 信藤宅地調査は、確認調査の結果、事業予定地内に遺跡の分布が認められなかつたため保管協議の対象となつてない。

第2節 桑上・桑下地区の調査経過と調査体制

1 調査の経過

桑上・桑下地区における事業予定区域のうち、事業策定時に保存協議対象となっていた周知の埋蔵文化財包蔵地は、桑下地区に所在する隠地東遺跡と信藤池遺跡の2遺跡であった。このことから当該地区における埋蔵文化財に対する対応はこの2遺跡となるものと計画当初は想定されていたが、前節で述べたとおり、事業用地西端である桑上地区においてせんご遺跡が確認され、ついで全面発掘調査を実施することとなったことから当初の計画は大きく変更されることとなった。

せんご遺跡については、全面調査実施が決定した段階で既に工事が発注済であり、1部においては工事が着手されていた。しかしながら、当初計画においては工期にやや余裕があったため、発掘調査は工事並行かつ前倒し実施ながらも調査対象面積 1630 m²に対し平成13年度事業分 900 m²、平成14年度事業分 730 m²と面積を配分して実施する方法で工事担当部局と調整合意し、着手することとなった。

平成13年度事業分は、地権者並びに工事担当部局、工事請負業者等との打合せ終了後、年度末を控えて慌しい中であったが2月上旬から着手した。終了予定期間は3月末である。調査区周辺は、土地所有者による水田整備等もほとんど行われておらず、旧地形が比較的よく残されており、試掘調査の状況から遺構の密度も低く検出についても比較的容易であったが、クロボク土様の粘性の高い堆積土に遺構面が検出されたことから、降雨のたびに検出面に手入れが必要となり、これに苦慮しながらも3月29日にすべての作業を完了した。

年度が改まり、平成14年度事業分として残る730 m²の調査に4月8日から着手した。工事請負業者と調整し、あらかじめ耕土・造成土等は着手前に排土しておいたことから、発掘作業は遺構検出作業から開始することができた。調査区は前年度調査区に続く田面であり、遺構密度等も同様の状況であったことから、契約工期に充分の余裕を残して終了する当初の見込みであった。

ところが、調査着手後数日して状況が一変した。それは、当該年度分の水稻及び転作奨励作物の作付けをは場整備工事の早期完了が見込めるのであれば行いたいとの地権者要望がある。については、工事請負業者に確認したところ、文化財調査の早期完了が見込めるのであれば連動して工事の早期完了も見込めるとの回答であったことから、極力文化財調査について早期の完了、出来れば4月末日の引き渡しを願いたいとの工事担当部局からの要望であった。早速持ち帰り内部協議を行なったが、原因が地権者であることから対応せざるを得ないという結論となり、内部事務等調整のうえ早期の完了を期して努力することになった。

この調査区の検出遺構はピットと溝のみであり、残存状況が非常に良好なものもあったが、遺構密度の低さが不幸中の幸いとなる結果となり、特に後半は調査休日が日曜日のみという作業状況となりながらも、5月7日に調査を完了し引渡しを行った。

せんご遺跡の調査完了後、平成14年6月～11月の間残る桑下地区の隠地東遺跡、信藤池遺跡の確認調査を実施した。結果、隠地東遺跡の遺跡範囲内において尾根裾及び倭文川の高位段丘上に遺構が確認された。信藤池遺跡については、対象区域内に遺跡が及ばないことが判明したため、隠地東遺跡の取り扱いが保存協議上の問題となった。前述のとおり、遺構が確認された位置が比較的高位であるため、そのほとんどが切土部分と重複し、設計上計画変更が不可能に近い状態であったため、この箇所において

もやむを得ず発掘調査での対応という結論に至った。調査対象面積は3,570 m²である。

調査の実施時期については、前例に準じて極力工事の進行を妨げないという観点から、対応できる範囲で出来るだけ前倒しする方向で内部調整を行い、せんご遺跡同様年度別に配分して実施することに決定した。すなわち平成14年度分として1,030 m²、平成15年度分として2,540 m²が年度別調査実施面積である。

平成14年度事業分は、せんご遺跡同様年度末を控えての中、1月末に機材搬入を行い調査に着手した。調査条件としては平成13年度のせんご遺跡調査に近似しており、発掘作業においては降雨時の対策が必要で、加えて調査地附近の農用排水路が雨水の排水と生活排水を兼用していたため、掘下げの都度仮設排水路を掘削しなければならず、水対策に相当の配慮が必要であった。この調査区においても遺構密度は低く、3月末には当該年度分における全ての作業を終了した。

本事業における最後の発掘調査事業となった平成15年度事業分については、調査工期にやや余裕があったため、年度始めの事務事業の立ち上げを終えたのち、5月1日から着手した。

調査予定区域のうち、平成13年度調査区に接した西調査区では、地形的に谷部に位置することから、これも平成13年度調査区と同様に水対策が常時必要とされた。加えて、倭文川に面する調査区北半についてでは、遺構面までに堆積した土が1m近くに達しており、重機を使用しても相当の日数を排土に必要とした。また、遺構密度の低さについては変わらなかったものの、調査区中央に検出された溝が調査区の最低部であったため、降雨時には幾度も雨水が集中し、この点からも予想外の時間を水対策に費やすこととなった。以上の条件であったが、西調査区の調査は8月上旬にはほぼ完了し、盆を挟んで8月20日に東調査区の発掘調査に着手した。

東調査区周辺においても、遺構密度は粗く、かつ一定の箇所に集中している傾向があったため比較的発掘調査は容易であったが、周辺の水田が同時に作付けを行っていた関係から、農業用水路の確保・機能維持に対する対策が必要であった。ただ、実際は調査着手時期が既に晩夏であったため、実際はむしろ雨水に対する配慮がより必要となる結果となった。

発掘調査そのものは前記の状況から特に大過なく推移し、10月27日をもって、平成15年度事業分の発掘調査を終了し、併せて確認調査を含め約3年に及んだ発掘調査事業を全て終了した。

調査日誌（抄）

（せんご遺跡）

平成14年

2月12日 調査機材搬入、調査区杭打ち作業。

13日 調査区表土剥ぎ、遺構検出作業開始。

3月9日 検出遺構掘下げ開始。

25日 発掘作業完了、全景写真撮影。

26日 調査機材取り片づけ。

29日 実測作業完了、調査完了。

4月8日 西調査区杭打ち作業、遺構検出作業開始。

13日 西調査区遺構掘下げ開始。

19日 西調査区発掘作業完了、全景写真撮影。東調査区杭打ち作業、遺構検出作業開始。

20日 東調査区遺構掘下げ開始。

27日 調査区内遺構再精査。

30日 東調査区発掘作業完了、全景写真撮影。

5月7日 実測作業完了、調査機材取り片づけ、調査完了。

（闇地東遺跡）

平成15年

1月31日	調査機材搬入作業。	28日	検出遺構掘り下げ開始。
2月3日	調査区及び排土置場の草刈作業及び 調査区杭打ち作業。	8月4日	西調査区発掘作業完了、全景写真撮 影。調査機材取片付け、搬出。
4日	調査区及び排土置場の表土剥ぎ開始。	7日	東調査区及び排土置場の草刈作業開始。
7日	1区遺構検出作業開始。	8日	発掘作業休止。
13日	2区遺構検出作業開始。	11日	西調査区現地補足作業完了、調査完了。
27日	2区発掘作業完了、全景写真撮影。	19日	作業再開。東調査区へ調査機材移転 作業。
3月6日	1区発掘作業完了、全景写真撮影。	20日	東調査区杭打ち作業。
14日	3区遺構検出作業開始。	25日	東調査区及び排土置場の表土剥ぎ作 業開始。
28日	3区発掘作業完了、全景写真撮影、 調査機材取り片付け、調査完了。	9月1日	遺構検出作業開始。
5月1日	西調査区、調査区杭打ち作業及び排 土置き場の草刈作業開始。	10月2日	検出遺構掘り下げ開始。
2日	調査機材搬入。	16日	発掘作業完了。全景写真撮影。
9日	調査区及び排土置場の表土剥ぎ作業 開始。	22日	調査機材取片付け、撤収作業。
20日	遺構検出作業開始。	27日	現地補足作業。最終取片付け、調査 完了。

2 調査の体制

発掘調査は、岡山県津山地方振興局からの委託を受けて、岡山県教育庁文化課（文化財課）の指導のもとに久米町教育委員会が実施した。なお、平成13年10月から12月末までについては、調査事業量の増大に対応し、真庭郡久世町教育委員会の協力を得て調査員の派遣を受け調査に対応した。

平成13年度

久米町教育委員会

教育長	甲元三男
教育課	
課長	庄司雅雄
課長補佐	浅岡康良
課長補佐	桶口佳子
主任	國米宏美

主事 仁木康治
(調査担当)

主事 妹尾修治
主事 岡田順一
主事 鈴木俊男
事務員 米本和貴
社会教育指導員 重松丈雄
管理員 春名公子

市町村派遣専門職員

真庭郡久世町教育委員会 主幹 池上 博

平成14・15年度

久米町教育委員会

教育長	甲元三男
教育課	

課長 庄司雅雄
(平成14年5月31日まで)

國米幸男
(平成14年6月1日から)

課長補佐	浅岡 康良
主 幹	新家 恵津子
係 長	木下 清美
主 任	國米 宏美
同	仁木 康治 (調査担当)

主 事	河野 茂夫
同	鈴木 俊男
主事補	尾塙 達也
社会教育指導員	重松 文雄
管理員	松下 洋子

発掘調査作業員

井上 正一	上原 次男
白川 すみ江	田中 茉子
森藤 和三郎	山本 采造

岡 秀俊	黒瀬 福雄	荒谷 柳次
筒塙 直治	野條 博	林原 出

(あいうえお順 敬称略)

3 整理の体制

整理作業は、最低限必要なものについては調査中に実施していたが、調査実施途中以降、本事業（1工区分）にかかる試掘・確認および全面調査の実施が相次ぎいために発掘調査が優先されたことから、当該事業にかかる調査が終了のち具体的な協議を行なうこととしていた。これを受け、平成15年度で本事業にかかる調査事業が終了したことから、年度別に第2工区（平成16年度）、第1工区（平成17年度）と区分し、2年次に渡って整理作業を行なうこととなった。

平成16年度については久米町教育委員会において整理および報告書作成作業を行ったが、平成17年2月末に久米町が津山市に合併したため、第1工区調査遺跡にかかる整理作業および・調査報告書作成事業は引き継ぎ事業として津山市において実施することとなった。

以上により、第1工区分の全面調査実施遺跡（せんご遺跡・隠地東遺跡）について、平成17年度において整理作業の体制をとり、報告書作成作業を行なった。

平成17年度

津山市教育委員会	
教 育 長	神崎 博彦
教育次長	兼田 延昭
文化課長	佐野 紗由

津山弥生の里文化財センター

所 長	中山 俊紀
次 長	行田 裕美
主 任	仁木 康治 (整理担当)

整理作業

野 上 恵 子	岩 本 えり子	家 元 弘 子	長 濱 幸 美	土 居 弥 生
---------	---------	---------	---------	---------

(順不同 敬称略)

なお、発掘調査及び調査報告書作成にあたっては、文化財センター職員各位および以下の団体、各氏から多大のご指導・ご教示をいただいた。記して感謝の意を申し上げます。

岡山県教育庁文化財課 池上 博 澤田 秀実 小野 雅明

(順不同 敬称略)

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

本書所収の2遺跡は、岡山県津山市桑上・桑下地内に所在する。遺跡の所在する津山市久米地区は津山盆地の辺縁部に位置し、東は吉井川によって遮られ、西は真庭市（旧真庭郡久世町・落合町）および久米郡美咲町（旧旭町）に、南は久米郡美咲町（旧旭町・中央町）に、北を苦田郡鏡野町に接する。地形は基本的に西から東へ下降する地形を示し、北部に矢倉山、中央部に幻住寺山、南部に天子山を最高峰とする標高500～600m級の比較的高峻な山々があり、その間を縫って吉井川の支流である久米川・倭文川が共に東流する。そして、久米川は吉井川に、倭文川は打穴川を合して吉井川支流の皿川に注ぐ。地域のほぼ7割を山林が占め、平野部はこの久米川・倭文川両河川の流域に沿って小規模な独立した沖積平野が形成されている。

桑上・桑下地区は、この2つの平野のうち久米地域における倭文川流域の中～下流域に属し、倭文川が打穴川と合流する位置にある。現在の行政区画上では東を津山市戸脇地区、西を里公文地区、南を久米郡美咲町、北を神代地区にそれぞれ接し、津山市から久米郡美咲町方面へ通じる国道429号線がこの平野部のはば中央を通っている。

今回の調査位置は、桑上・桑下地区のうち倭文川の右岸にあたる部分で、二上山地（久米郡美咲町）から派生する尾根の最北端部分から倭文川の高位段丘上にあたる。以下、調査位置の所在する倭文川中～下流域を中心にして概観しない。

久米地域内では約650ヶ所^(注1)の遺跡が確認されているが、倭文川流域での最も古い生活の痕跡は縄文時代に遡る。上流域の油木下地内から乳棒状石斧が、中～下流域の稼山南斜面の芦ヶ谷遺跡では後期、稼山遺跡ではサヌカイトの剥片や多数の小型石器片などが確認されている^(注2)。

弥生時代については、県北においても中期後半以降爆発的な遺跡数の増加を示すが、本流域についても同様の傾向を示す。稼山遺跡、荒神西遺跡、荒神遺跡、釜田遺跡、釜田南遺跡、高尾山遺跡などが中期後半～後期前半を遺跡の存続期として標高180～200mの尾根上に所在する。

曾根田遺跡はこれら遺跡に対して低位段丘上に位置し、対照的な在り方を示している。このような例は本町におけるもう一つの平野である久米川流域においても同様にみることができる。

古墳時代に入ると、倭文川中～下流域を中心に多数の古墳が築造されているが、本流域における古墳時代前期～中期における最大の古墳は、上流域である油木北に所在する奥の前1号墳である。同古墳は全長65mを測り、楕円筒・壺型埴輪を伴う前方後円墳^(注3)で、長持形石棺の埋葬主体を有し、短甲（堅矧板革縫短甲）、内行花文鏡・銅鏡などがある^(注4)。美作地方においても有数の規模であり、発掘調査の成果等から4世紀後半の築造であることが判明している。

そのほかには、中流域の丸尾瓢箪山古墳、中～下流域の瓢箪山1号墳は何れも全長30～35m級の前方後円墳であるが、奥の前1号墳のみが突出している状況であり、本流域におけるこの時期の首長墓の系列については不明といわざるを得ない。このほか当時期に該当すると考えられるものとしては、径29mの円墳で蛇行剣の出土が伝えられる里公文の藤藏池1号墳がある。

古墳時代後期になると古墳の数は急激に増加するが、分布にはかなりの偏りがみられる。すなわち流域には量的にも少なく単独で立地する形態を多くとるが、中～下流域では稼山南斜面に圧倒的な分布を示し、その多くが横穴式石室内に陶棺を内蔵することに特色がある。発掘調査の成果によると、これ



- | | | | | | |
|---------------|----------------|--------------------|-------------------|--------------------|--------------|
| 1. 成友1号墳 | 2. 成友2号墳 | 3. 成友遺跡 | 4. 多汲居古墳 | 5. 高細1号墳 | 6. 高細2号墳 |
| 7. 高細3号墳 | 8. 高細道跡 | 9. 桶木道跡 | 10. 水溜1～3号墳、水溜A道跡 | 11. 水溜4号墳 | |
| 12. 水溜5号墳 | 13. 觀音免2号墳 | 14. 觀音免1号墳 | 15. 親音免土塁墓群 | 16. 埋池1～4号墳 | 17. 大藏池北道跡 |
| 18. 大藏池南側生道跡 | 19. 大藏池南側鉄道跡 | 20. 橋城跡 | 21. 墓公園道跡 | 22. 枯尾谷道跡 | 23. 大藏池道跡 |
| 24. ピカガコ道跡 | 25. ピカ"121～3号墳 | 26. 底広西古墳 | 27. 底広西道跡 | 28. 雅神西道跡 | 29. 雅神西古墳 |
| 30. 雅神古墳 | 31. 雅神道跡 | 32. 稲ヶ塔道跡 | 33. 石ノ才1～8号墳 | 34. 壺ヶ塔道跡 | 35. 稲山山頂道跡 |
| 36. 稲山道跡 | 37. 稲山1～6号墳 | 38. 大成1～4号墳 | 39. 牛若道跡 | 40. 牛若西古墳 | 41. 高岩1号墳 |
| 42. 七つ塚1～8号墳 | 43. 高岩2号墳 | 44. 芦ヶ谷古墳 | 45. 芦ヶ谷道跡 | 46. 斎田道跡 | 47. 斎田1号墳 |
| 48. 斎田2号墳 | 49. 斎田南道跡 | 50. 斎田南古墳 | 51. 落山1～3号墳 | 52. 落山道跡 | 53. 落山古墳 |
| 54. 落山道跡 | 55. 小島道跡 | 56. 宜広道跡 | 57. 西御殿跡 | 58. 黃市村1～7号墳、黃市村道跡 | |
| 59. 木船A道跡 | 60. 木船B道跡 | 61. 丸尾道跡 | 62. 丸尾御冢山古墳 | 63. 小島道跡 | 64. 雅望山1号墳 |
| 65. 雅望山2号墳 | 66. 落山東古墳 | 67. 同の上古墓群 | 68. こぶしが鼻古墓群 | 69. こぶしが鼻道跡 | 70. 正友古墳 |
| 71. コウデン1～8号墳 | 72. 高尾山道跡 | 73. 青木道跡 | 74. 寺尾道跡 | 75. 日向1～5号墳 | 76. 半太道跡 |
| 77. 桦田道跡 | 78. 曾根田道跡 | 79. 久保田道跡 | 80. 江原兵庫助別跡 | 81. 戸脇1～4号墳、戸脇10号墳 | |
| 82. 戸脇土塁状道構 | 83. 戸脇11号墳 | 84. 戸脇5～9号墳、戸脇12号墳 | 85. 信濃池道跡 | 86. 開地東道跡 | |
| 87. 十日1～7号墳 | 88. 慶恩寺1～4号墳 | 89. せんご道跡 | 90. 丸日塚1～5号墳 | 91. 丸日塚道跡 | 92. 十丈山1～8号墳 |
| 93. 十丈山道跡 | 94. 真光寺裏土塁墓群 | | | | |

第5図 周辺遺跡分布図 (S=1/20,000)

ら古墳への鉄滓供獻例が顕著に認められることから、古墳の被葬者たちが鉄にかかわっていたであろうことが指摘されている。このことに関連して、中流域北半の分水嶺付近である大蔵池南製鐵遺跡では、発掘調査の成果、一定の区域に数次にわたり作業面を造成のち、操業にあたっては人工送風による箱型炉により操業されたということ、そして操業時期は6世紀後半まで遡り得ることが報告されている。現時点では古墳の被葬者と直接結び付く証拠はないものの、強い関連性が認められるといえる^{〔注5〕}。また、稼山南斜面には鉄穴流しと呼ばれる砂鉄採取のための斜面を利用した溝が多数認められる。前述の後期古墳や製鐵遺跡との直接の関連性は現時点では認められていないが、注目すべき遺構であるといえる。

古墳時代の生活址は確認例が少ない。芦ヶ谷遺跡で前期に属する集落が確認されているが、弥生時代から連続するものであろうか。また、曾根田遺跡では方形住居址が確認されている。これら以外では、大沢遺跡、大沢B遺跡、信藤池遺跡などで遺物が出土しているものの詳細は述べることができず、久米地城内の本流域のみで考えた場合、地形的な条件から前出の奥の前1号墳を築造した勢力の基盤が何であったかは大きな疑問であるといえる。

和銅6年（713）、備前の国から6郡を分割して美作国がおかれた。若干記述の時期は下るが、「和名抄」にみえる久米地城は、久米郡のうちの大井、久米、倭文各郷に所属すると考えられ、また本流域は倭文郷にあたると推定される。古代～中世の遺構は、稼山火葬墓、大沢火葬墓、荒神1号・2号火葬墓、落山東火葬墓において奈良～平安時代の火葬墓が確認されているほか、稼山南斜面のコウデン2号墳付近の土壙から平安期の鏡が出土している。集落遺跡としては、半太遺跡、稗田遺跡、久保田遺跡、せんご遺跡、隠地東遺跡及びこぶしがはな遺跡、青木遺跡、寺尾遺跡、信藤池遺跡等をあげることができるが、あととの4遺跡は何れも散布地であり詳説できない。また、少し本流域からは遠ざかるが、稼山山頂付近には集石遺構がある。墳墓とみられているが、勝間田焼や青磁片の出土を見ている。なお、山間部の旧稼山集落付近でも勝間田焼片が採取されていることから、古代～中世において集落の存在した可能性が考えられる。

室町～戦国期になると本流域においても里公文の平福寺城、油木北の高山城など、中小の山城が築城される。先に述べたとおり、この地域は現在でも津山から旭川流域への主要な交通路になっているが、古くからこの交通路は機能したと考えられ、この交通路、およびこれから派生するルートを抑えるためであると考えられる。

近世は津山藩（森氏）の支配を受けたが、森氏の除封後幕府領、甲府藩（徳川氏）、竜野藩（脇坂氏）預り地、小田原藩（大久保氏）、津山藩（松平氏）、浜田藩（松平氏）などが數か村別に支配するという複雑な統治形態となった。幕末には第2次幕長戦争後、石見浜田藩が飛領地であったこの地域に移動のち鶴田（たづた）藩が成立し、最末期には津山藩領以外のほぼ全域を領して麻藩置県に至っている。

注

〔注1〕『改訂版 稼山系遺跡地図』岡山県教育委員会 2000年

〔注2〕村上幸雄・橋本慈司『稼山遺跡群Ⅰ～Ⅲ』久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1979・1980年。以下、稼山南斜面に所在する遺跡群に関する記述は本報告による。

〔注3〕『奥の前1号墳 第5次発掘調査現地説明会資料』同古墳発掘調査団 2003年 なお、調査に関する詳細については調査担当者である倉林・澤田両氏の教示による。

〔注4〕倉林真砂斗・澤田秀実ほか『美作の首長墳』『美作地方における前方後円墳秩序の構造的研究』2000年。

〔注5〕森田友子『稼山遺跡群Ⅳ』久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1982年

<参照・参考文献>

『岡山県地名辞典』	平凡社	1988年
『久米郡史』	久米郡教育会編	1922年
『久米町史』	久米町史編纂委員会	1984年

第3章 試掘・確認調査

第1節 桑上地区（試掘調査）

第1工区のうち、桑上地区については、ほ場整備計画策定時において周知の遺跡は存在していなかった。しかしながら、周辺の遺跡の分布状況や地形の条件から遺跡の存在が予測され、また分布調査については未済の地区であったことから、前章に述べたように詳細分布調査を実施したところ、弥生時代及び中世の遺物が分布することが認められた。

このことにより、遺跡の存在する確度が高まったため、遺跡の所在の有無及び範囲確認を目的とし、久米町教育委員会が調査主体として岡山県教育委員会の指導を受け、試掘調査を実施した。調査期間は平成13年11月17日から平成14年1月11日である。

試掘調査においては、前記の詳細分布調査の成果により、 $2 \times 5\text{m}$ のトレンチを当初10本設定し、必要に応じて部分的な拡張を行いながら調査を進めたが、調査途上において分布状況の把握に不充分であると判断し、4本のトレンチを追加して合計14本のトレンチで調査を行った。調査面積は 165 m^2 である。なお、トレンチ設定については、他の確認調査と同様には場整備事業の計画予定標高を考慮して切土部分に重点的に配置した。

試掘調査の結果、尾根に接する高位部分のトレンチ（T.7～T.9）において遺構（ピット）が確認された。これらは残存状態が良好なもので直径30cm、検出面からの深さ60cmを測り、木質の残存が認められるものもあった。遺構の時期は出土遺物から中世と判断された。

また、段丘面の下位部分及び尾根の最高位部分は既に削平されており、遺構は尾根に接する高位部分の平坦面及び尾根上に分布することが判明し、さらに、調査区北端部分のトレンチでは倭文川の旧河道を推定し得る成果を得た。



第6図 試掘調査トレンチ配置図 (S=1/5,000)

出土遺物については、包含層からの出土であるが、弥生土器・須恵器・土師器・瓦質土器が出土し、量的には中世のものが多数を占めるものの、遺構時期の判断材料になるものはごく僅かであった。

なお、本調査により発見された遺跡の名称については、小字名によりせんご遺跡と呼称することとした。各トレンチの詳細については次のとおりである。

T 1

2×5m のトレンチである。地表から約 55～65cm で基盤層に達し、緩やかに傾斜する地形を示す。遺構は確認されなかった。

T 2

2×5m のトレンチである。地表から約 25～60cm で基盤層を検出した。遺構の確認はなし。

T 3 (第7図)

2×5m のトレンチであるが若干の拡張を行なっている。地表から約 30cm で基盤層に達する。浅いピットが確認されたが、埋土からごく最近のものであると判断された。

T 4

2×10m のトレンチである。地表から約 50cm で基盤層に至る。幅約 120～260cm の溝状のごく浅い落ち込みを認めたが、人工的なものではないと判断した。

T 5 (第7図)

2×5m のトレンチである。15m まで掘下げを行なった。地表から耕土、自然堆積を考えられる粘土層が厚く堆積し、約 1.4m で砂礫層に達する。遺構は確認されなかった。

T 6

2×5m のトレンチであるが、耕土直下に基盤層が検出された。遺構は認められなかった。

T 7 (第8図)

2×5m のトレンチである。近年に約 60cm の造成（かさ上げ）を受けており、造成層以下が旧水田層である。この水田耕土及び下層の粘質土以下に中世の包含層が認められ、ピットが確認された。なお、基盤層までの掘下げは行なっていない。

T 8 (第9図)

当初 2×5m のトレンチとして設定し、耕土から約 40～120cm で基盤層に至る。約 10cm の耕土を除去した段階でピットを検出したため、このレベルで東側以外をそれぞれ拡張した。このことから、発掘面積はほぼ倍増している。トレンチの層序は、遺構検出面以下は黒ボク土様の暗褐色粘質土が厚く堆積し、下層には同様の黒褐色粘質土が堆積し基盤層に至る。前者と後者はごく近似していたため、周辺地形等から前者は 2 次堆積と判断された。

T9 (第8図)

2×10mのトレンチである。地表から約50～90cmで基盤層である。基盤層を掘り込む形でピットが確認された。

T10

2×5mのトレンチとして設定した。地表以下約20～40cmで基盤層に至り、基盤層を掘り込む形でピットが確認されたため周辺の拡張を行なっている。なお、ピットについては精査したところ、ごく最近のものであることが判明した。

T11

2×5mのトレンチである。1.1mまで掘り下げを行なったが、遺構の確認はできなかった。

T12

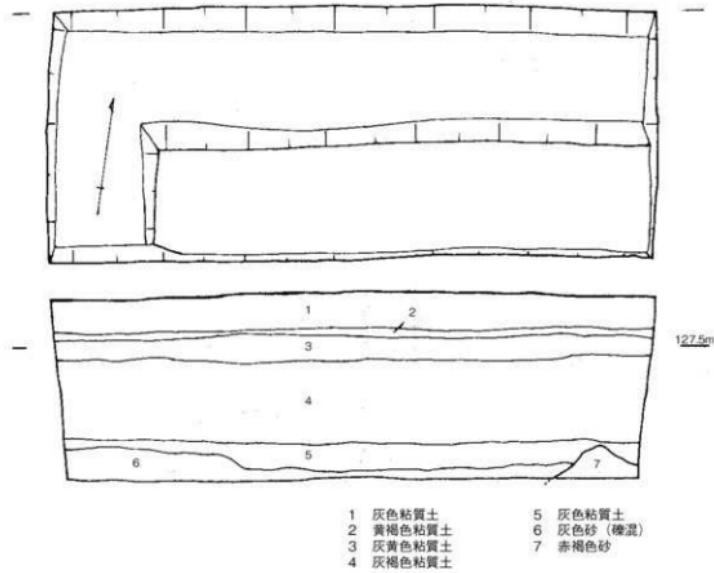
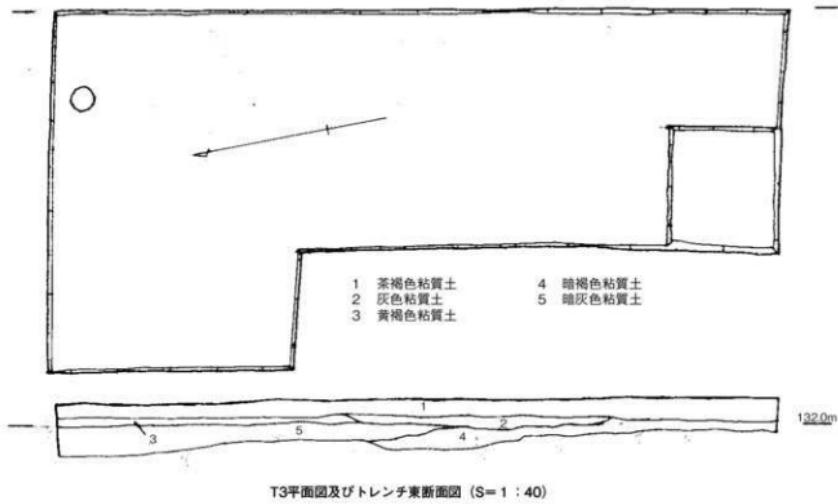
2×5mのトレンチである。南西端で地表から約40cmで基盤層を確認したが、北東方向に急激に下降していくことが確認された。このため最深部で約1mまでの掘下げに留めている。近年の杭穴が認められたのみである。

T13

2×5mのトレンチである。西端で地表から約40cmで基盤層が認められたが、トレンチ東半では急激に下降する地形を示したため、東端で1.1mまで掘下げに留めている。遺構は認められなかった。

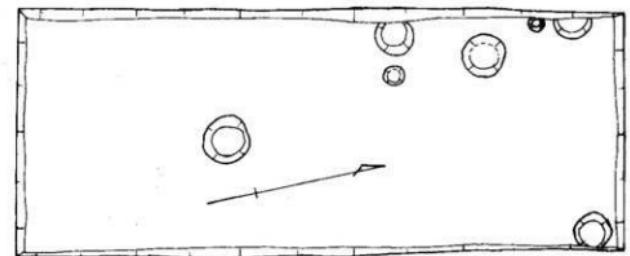
T14

2×5mのトレンチである。耕土以下は基盤層である。遺構の確認はできなかった。



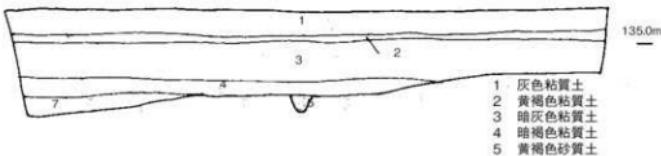
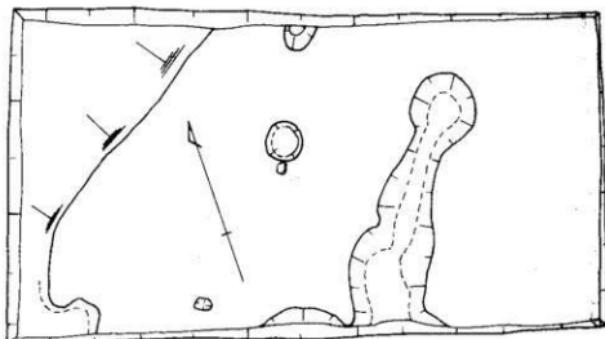
T5平面図及びトレンチ東断面図 ($S=1:40$)

第7図 試掘調査トレンチ平・断面図 (1) ($S=1/40$)



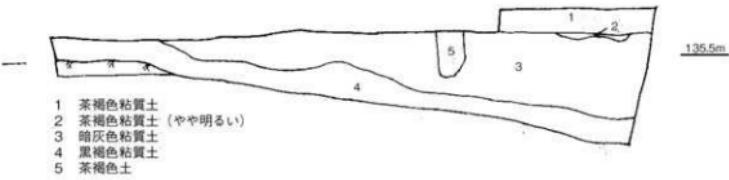
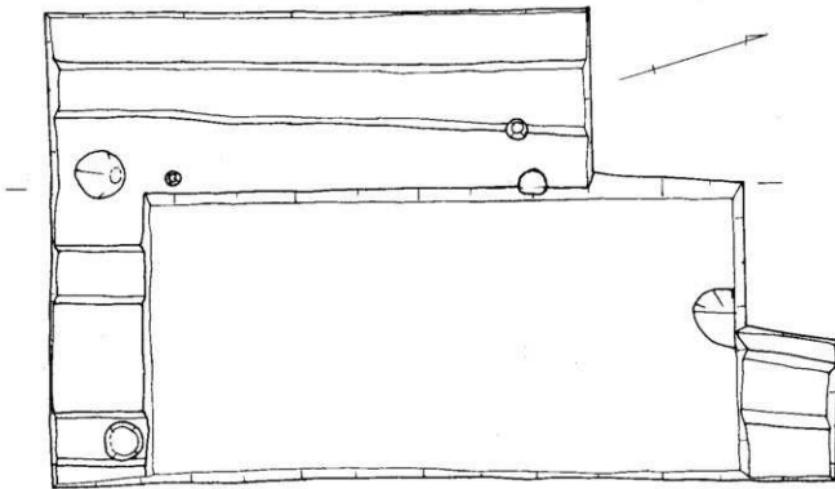
- 1 茶褐色土
2 灰褐色粘質土
3 灰色粘質土
4 灰色粘質土(暗褐色ブロック)
5 暗灰色粘質土
- 6 黄褐色粘質土
7 灰褐色粘質土(砂混)
8 暗褐色粘質土
9 灰色粘質土(黄色ブロック混)
10 黄褐色粘質土(やや暗い)

T7平面図及びトレーニチ西断面図 (S=1:40)



T9平面図及びトレーニチ北断面図 (S=1:40)

第8図 試掘調査トレーニチ平・断面図 (2) (S=1/40)



T8平面図及びトレンチ断面図 (S=1:40)

第9図 試掘調査トレンチ平・断面図(3) (S=1/40)

第2節 桑下地区（確認調査）

桑下地区においては、計画当初から隠地東遺跡及び信藤池遺跡が事業区域内に及ぶ可能性が認められたため、遺構の有無及び範囲確認を主な目的として確認調査を実施した。確認調査は、せんご遺跡の全面調査が終了した平成14年6月3日から着手した。調査完了は同年10月25日である。

隠地東遺跡では、調査前の段階において分布調査等の成果や周辺の地形から、河岸段丘上の尾根先端及び連続する高位部分に遺跡の所在が想定され、また、工事対象区域最東端の台地上の尾根部分まで当該尾根の上位部分に所在する信藤池遺跡の遺跡範囲が広がることが想定された。

以上のことから、調査にあたっては周辺の地形を考慮しつつ、これらの地点を重点的に実施することとし、 $2 \times 5\text{ m}$ のトレンチを28本設定し調査を実施した。個々のトレンチは、調査中必要に応じて若干の位置の変更や部分的な拡張を行ったため、最終的には若干の調査面積の増をみている。調査面積は 295 m^2 である。また、トレンチ位置については前記の方針に加え、切土部分を最優先に調査するようトレーニングを行い、既調査の成果等から旧河道が想定される部分については、必要最低限の確認のみで留めた。

調査の結果、調査区画中央部の尾根に接する高位部分（T11～T15）のトレンチにおいてピット及び溝状遺構が確認され、区域東端（T20～T22）においてもピットが確認された。確認された遺構は、ピットが残存状況の良好なもので径約 20 cm 、検出面からの深さ 40 cm 程度を測り、木質の遺存するものもあった。溝状遺構は検出面での幅 $1.0 \sim 1.5\text{ m}$ 、深さ 0.4 m 程度のものであった。ただし、確認された範囲内においても小規模な耕作整理の実施に伴い、遺構の認められない箇所も存在する。加えて、調査区画北端部分のトレンチでは、倭文川の旧河道を推定し得る成果を得ることができた。

これら以外の調査結果については、当初に遺跡の分布が考えられた用地東端の尾根上については、部分的に旧地形の変化が相当の範囲で認められ、尾根の最高位部分においては削平されていることを確認した。なお、事業予定地最東端の台地上の尾根部分（対象遺跡→信藤池遺跡）には遺構は確認されず、遺跡範囲は当該地点まで広がらないことを確認した。

検出された遺構の時期については、出土遺物から概ね弥生時代及び中世と考えられた。

また、遺物は、弥生土器・須恵器・土師器・瓦質土器等及び鉄滓・石錘等が出土しているが、包含層の出土がほとんどであり、検出遺構の所属時期に結びつくものはごく僅かであった。

本調査の成果から、想定される遺跡範囲は、調査区画中央の尾根先端及び緩斜面全域（T11～T15）及び用地東端の尾根上に部分的に所在すると判断された。

各トレンチの詳細は次のとおりである。

T 1

$2 \times 5\text{ m}$ のトレンチである。地表から約 1 m まで掘り下げを行なったが、自然流路と考えられる層を断面で確認したのみであった。遺構は認められなかった。

T 2

$2 \times 5\text{ m}$ のトレンチである。地表から一部約 1.4 m まで掘り下げたが、基盤層に達しなかった。遺構は確認されなかった。



第10図 確認調査トレンチ配置図 (S=1/5,000)

T 3

2 × 5 m のトレンチである。地表から約 70cm まで掘下げた位置で基盤層に達した。遺構は確認されなかった。

T 4

2 × 10 m のトレンチである。地表から約 40cm で基盤層に達した。このトレンチでは、基盤層に掘り込まれた径 10 ~ 15cm、深さ 25 ~ 30cm 程度のピットを確認したが、埋土からごく新しい時期のものと判断された。

T 5

2 × 5 m のトレンチである。地表から約 30cm で基盤層に達した。北に向かって緩く傾斜する地形を示す。遺構は確認されなかった。

T 6

2 × 5 m のトレンチである。地表から約 1 m まで掘り下げを行って基盤層に達する。水田造成に伴うと考えられる数次の整地層が認められた。遺構は認められなかった。

T 7

2 × 5 m のトレンチである。耕土以下は暗灰色粘質土が堆積し、地表から約 40cm で基盤層に至る。遺構は確認されなかった。

T 8

2 × 5 m のトレンチである。約 1 m まで掘下げを行なった。耕土以下約 30cm で砂礫層が確認され、倭文川の旧河道であると判断された。

T 9

2 × 5 m のトレンチである。河岸段丘面の最下位であり、調査前から地形的に倭文川の旧河道であると想定された。耕作土直下は粘土層であるが、約 45cm で砂礫層に変わる。地表 1 m 以下は湧水が著しく、以下の調査は行なっていない。遺構は確認されなかった。

T10

24 × 5.5 m のトレンチである。当初 2 × 5 m の規模であったが、若干の拡張を行なっている。地表から 90cm まで掘下げて砂礫層に至る。上層では数次の耕作に伴う整地面が認められた。遺構は認められなかった。

T11 (第 11 図)

2 × 5 m のトレンチである。地表から約 60 ~ 90cm 掘下げて基盤層に達し、基盤層に掘り込まれたピットを確認した。

T12 (第 11 図)

2 × 5 m のトレンチである。地表から約 50cm で遺構面を検出し、ピットを確認した。遺構面は北に緩く傾斜し、北端で急激に下降する地形を示す。以下 1 m 附近まで掘下げたが、他に遺構は確認できなかった。なお、検出遺構の時期は中世と判断された。

T13 (第 13 図)

2 × 5 m のトレンチである。地表から約 40cm で多数のピット及び溝状の落ち込みを検出した。この遺構面は T12 と同様北に緩く傾斜し、続くものと考えられる。この面から更に 60cm 掘下げて基盤層に達したが、他に遺構は確認できなかった。

T14

2 × 5 m のトレンチである。地表から約 60cm でピットを検出した。時期は埋土からごく新しいものである。また、トレンチ内を斜めに横切る溝状の落ち込みを検出したが、これについても新しい時期のものであると判断した。

T15 (第 12 図)

2 × 5 m で設定したトレンチである。約 20cm の耕土を排土した段階で基盤層に達したが、基盤層を掘り込んだ浅い U 字状を呈する溝状の落ち込みが検出され、併せて埋土から多量の弥生土器片が出土した。このため、溝状落ち込みの延長上に追加トレンチを設定して掘下げた結果、溝と判断した。溝は、低地である倭文川（北）の方向に延びるものである。他に浅いピットを検出した。

T16

2 × 5 m のトレンチであるが、一部拡張を行なっている。地表から約 15cm で基盤層に至る。基盤層を掘り込むピット及び不定形な土壤状の落ち込み、また溝状の落ち込みを検出したが、ピット以外は搅乱または旧水田に伴う溝と判断した。

T17

規模は、2 × 10 m である。地表から約 80cm まで掘り下げを行なったが、耕土以下は大規模かつ人為的な造成行為が行なわれており、多少の遺物は出土したものとの遺構は皆無であった。

T18

規模は、2 × 5 m であるが、若干の拡張を行なっている。T17 と同じく、耕土以下は大規模な変更を受けしており、遺物は出土したものとの遺構は皆無であった。

T19

規模は、2 × 5 m である。地表から約 20cm で基盤層に至る。浅い溝状の落ち込みが認められたが、埋土からごく新しい時期のものであると判断された。旧水田に伴うものと考えられる。遺構は確認されなかった。

T20 (第13図)

規模は、 2×10 m である。地表から約 15 ~ 25cm で基盤層に至り、明確なピットを確認した。

T21

規模は、 2×5 m である。地表から約 30 ~ 50cm で基盤層に達する。遺構は確認できなかった。

T22

規模は、 2×5 m である。地山面まで掘り下げを行ない、ごく浅いピットを確認した。

T23

規模は、 2×5 m である。地山まで約 40 ~ 60cm 掘り下げを行なったが、遺構は認められなかった。

T24

規模は、 2×5 m である。地山面まで約 60 ~ 90cm 掘り下げを行い、不定形な凹凸を認めたが、遺構ではないと判断した。

T25

規模は、 2×5 m である。地表から約 30 ~ 40cm で基盤層に至る。溝状の不定形な落ち込みが認められたが、遺構ではないと判断した。

T26

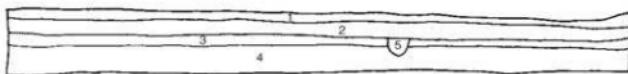
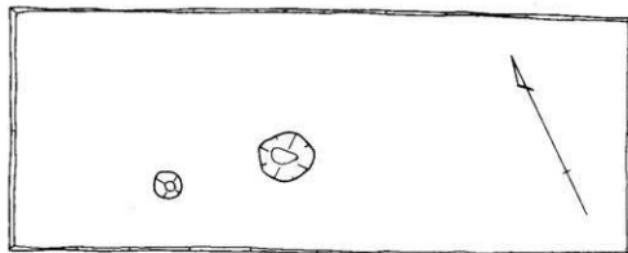
規模は、 2×5 m である。地表から約 80 ~ 120cm で基盤層である。耕土以下約 50cm で遺物が比較的出土したが、下層に明確な遺構は認められなかった。

T27

規模は、 2×5 m である。地山面まで掘り下げを行い、不定形な落ち込みが見られたため拡張を行なったが、遺構ではないと判断された。また、浅いピットが確認されたが、ごく新しいものであった。

T28

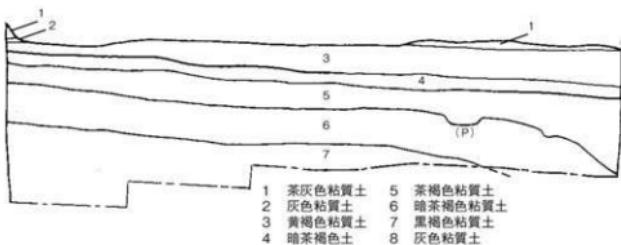
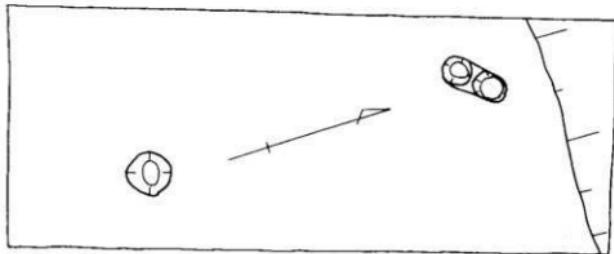
規模は、 2×5 m である。約 90cm まで掘り下げを行なったが、近年と考えられる水田造成の痕跡が確認できたのみであった。遺構は確認できなかった。



- 1 黄灰色粘質土
2 (明) 灰色粘質土
3 暗褐色粘質土
4 黑褐色粘質土
5 暗灰色粘質土

129.8m

T11平面図及びトレンチ北断面図 ($S=1:40$)

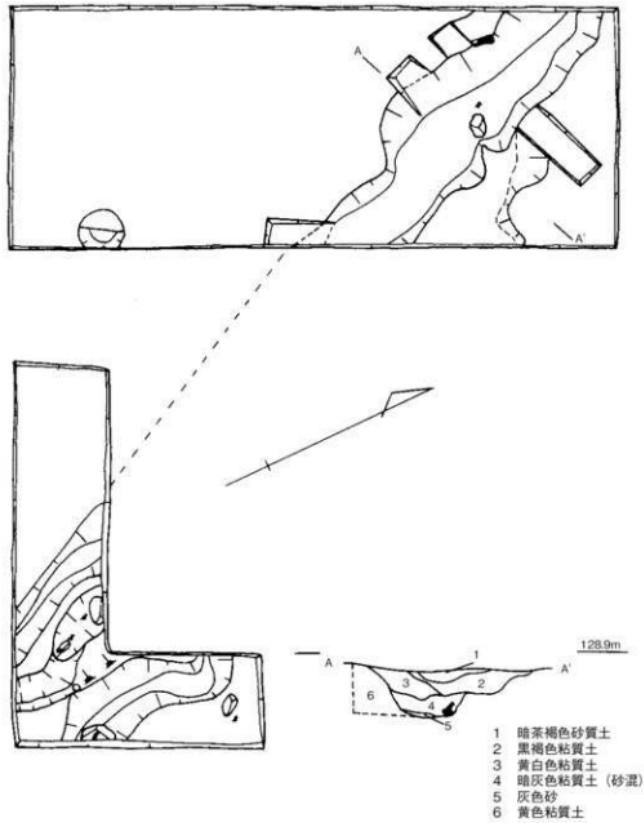


- 1 茶灰色粘質土
2 灰色粘質土
3 黄褐色粘質土
4 暗茶褐色土
5 茶褐色粘質土
6 暗茶褐色粘質土
7 黑褐色粘質土
8 灰色粘質土

129.8m

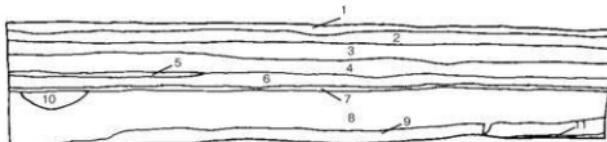
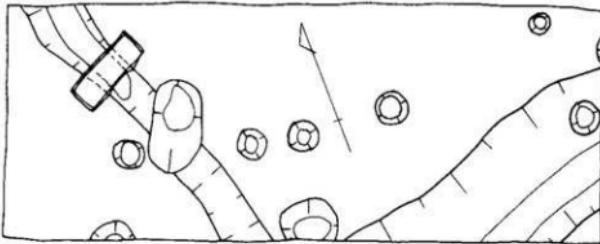
T12平面図及びトレンチ西断面図 ($S=1:40$)

第11図 確認調査トレンチ平・断面図 (1) ($S=1/40$)



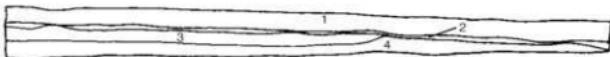
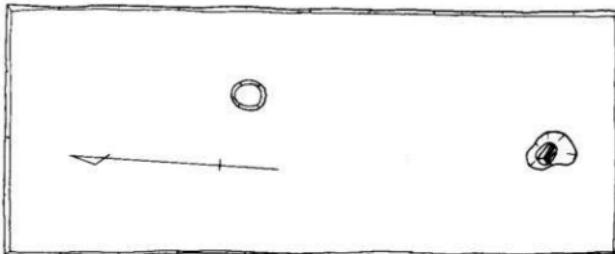
T15平面図及び溝部分断面図 (S=1:40)

第12図 確認調査トレーンチ平・断面図 (2) (S=1/40)



- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1 暗灰色粘質土 | 7 茶褐色粘質土 |
| 2 明灰色粘質土 | 8 黒褐色粘質土 |
| 3 黄白色粘質土 | 9 黑褐色粘質土 (黄色ブロック混) |
| 4 明灰色粘質土 (黄色ブロック混) | 10 暗茶 (灰) 褐色粘質土 |
| 5 黄褐色粘質土 | 11 黄灰色粘質土 (ベース) |
| 6 黄褐色粘質土 | |

T13構造面 (8層) 平面図及びトレンチ北断面図 ($S=1:40$)



- | |
|--------------------|
| 1 灰色粘質土 |
| 2 黄褐色粘質土 |
| 3 暗褐色粘質土 (黄色ブロック混) |
| 4 暗褐色粘質土 |

128.9m

T20平面図及びトレンチ東断面図 ($S=1:40$)

第13図 確認調査トレンチ平・断面図 (3) ($S=1:40$)

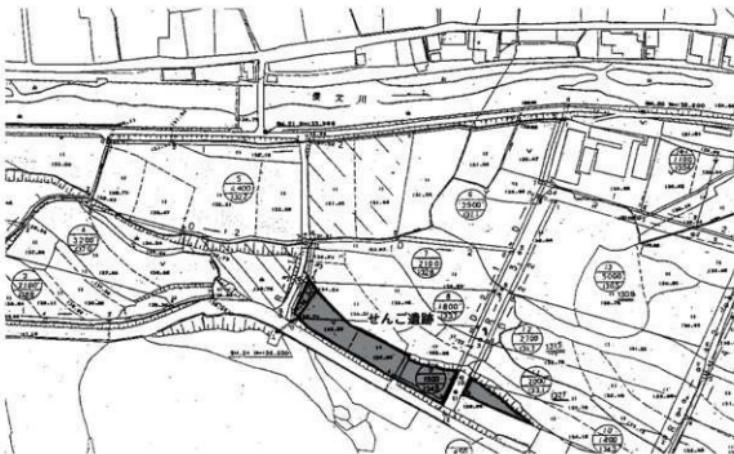
第4章 センゴ遺跡

第1節 遺跡の位置と調査の概要

センゴ遺跡は、倭文川中流域の右岸に広がる狭長な沖積平野に面する。平野部の南端は津山市・美咲町境にあたる山塊から北向きの方向の倭文川、あるいは東方向への打穴川（久米郡中央町）に向かって派生する尾根の末端部に接する。倭文川付近では河岸段丘面が認められる。尾根の先端から倭文川に至る低地に向けては急激に降下する地形を示し、一帯の標高は約130 m～135 mである。また、尾根先端に接する高位部分においては小規模な窪地状の谷が存在し、これに沿って僅かではあるが帯状のやや平坦な地形を認めることができ、本遺跡は、この尾根に接する高位の平坦地部分と尾根上にも分布すると推定される。発掘調査区の現状は畠として利用されており、聞き取りによると以前は水田として利用されていたとのことであった。

発掘調査は、先にも述べたように事業量との関係から調査対象地を概ね中央付近で2分し、平成13・14年度の2ヵ年度で対応した。調査にあたっては、調査員立会いのもとに重機による耕土の排土作業をおこなったのち、作業の終了後人力による遺構検出・掘り下げを行った。なお、遺物包含層についても調査期間の短縮のため、可能な限り重機により耕土を行なっている。遺構の残存度は、調査区西半部分は削平を受けていたものの、全体的には良好であった。しかしながら遺構検出面が基盤層若しくは基盤層の上面に堆積した黒褐色土上端に検出されたことと、柱穴からの遺物がほとんどであったため、検出遺構の時期に結びつくものが極めて少なく判定は困難であった。

このため、遺構埋土及び包含層遺物による判定に頼らざるを得なかつたことを付記し、以下検出された各遺構について述べる。

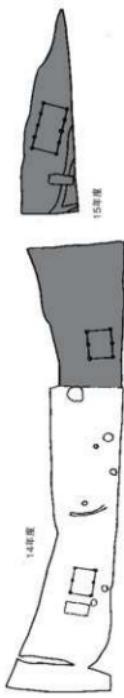


第14図 センゴ遺跡調査区域図 S=1/2,500

第16図 せんご道路年度別保有面積図 S=1/600



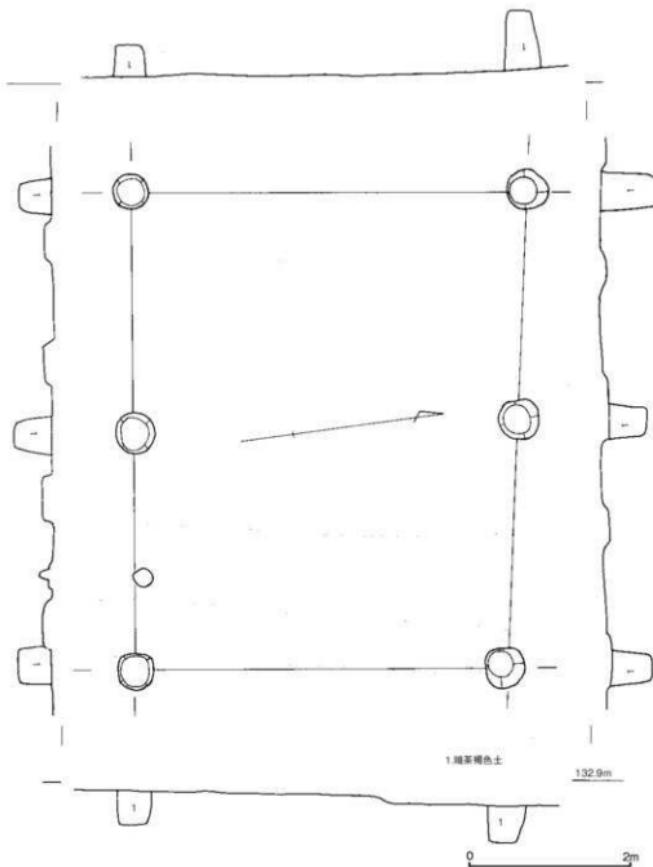
第15図 せんご道路年度別保有面積図 S=1/1,000



第2節 遺構と遺物

建物1（第17図）

13年度調査区西端近くで検出された桁行2間×梁間1間の掘立柱建物である。調査区全体においても西端に位置する。桁行はほぼ等高線に並行するかたちで東西方向にとられておりやや東向きに振られている。桁行に対して梁間がやや長めで幾分間延びた印象を受け、かつ付近に比較的多数の柱穴が検出されていたため構列等の可能性も検討したが、他調査区の状況とも照らし合わせて建物と判断した。上面の削平を若干受けていると判断され、遺存状況はあまりよくないが、規模は桁行5.4～5.5m、梁間4.1～4.3m、桁行の柱間2.7～2.8mを測る。出土遺物は皆無である。

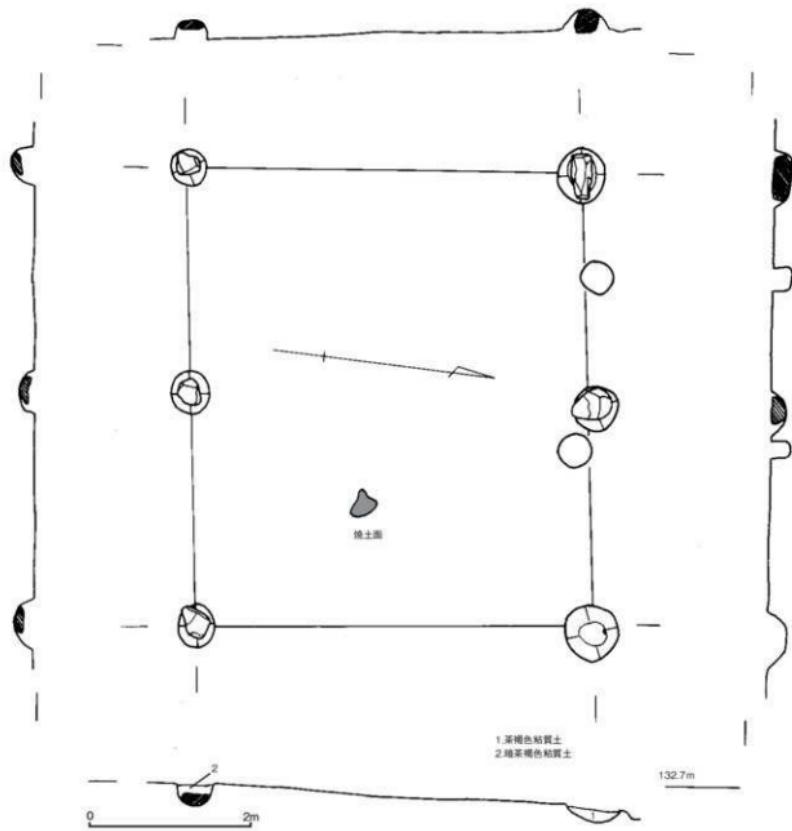


第17図 建物1平・断面図 (S=1/60)

建物2（第18図）

14年度調査区のやや西より、調査区全体のほぼ中央に検出された桁行2間×梁間1間の礎石建物である。柱穴掘り方は20~25cmとごく浅く、礎石は北側（谷側）の柱穴列が総じて大きい。また、北東角の柱穴は検出時に既に礎石が存在せず、埋土が非常に締まっており掘下げに困難をきたすほどであったことから、抜き取り後に埋められたものと考える。なお、礎石が残る他の柱穴も礎石上端までの埋土は同様の状況であった。桁行は等高線にはば並行で東西方向に立っているが、他の建物と軸線は異なり、やや西に振る。建物の規模は桁行5.5m、梁間4.7~4.8mで、桁行の柱間はそれぞれ2.4mを測るが、他の建物と同じく桁行に対して梁間がやや長い印象である。この建物の範囲内に焼土面が1ヶ所確認されたが、建物との関連は不明である。

出土遺物は、柱穴埋土中に微細な土師器片らしきものが認められた程度で形をなすものはない。

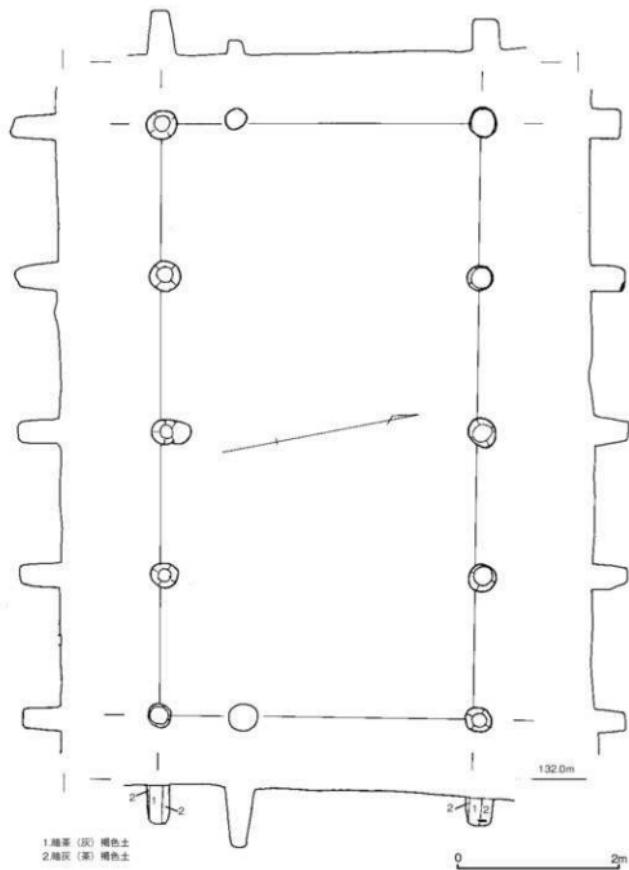


第18図 建物2平・断面図 (S=1/60)

建物3（第19図）

調査区東端の位置で検出された、桁行4間×梁間1間の掘立柱建物である。平面形は、桁行北側、南側がそれぞれ9.6m、9.5m、梁間はそれぞれ5.04～5.06mとかなり大きいが、均整のとれたプランを示す。建物1と同様に桁行に対して梁間がやや長めで幾分間延びた印象を受け、かつ付近に比較的多数の柱穴が検出されていたため柵列等の可能性も検討した結果建物と判断した。桁行は東西にとられ、建物1とはほぼ平行な振り方である。この遺構は遺存状況が良く、建物を構成する柱穴自体の大きさはほぼ同一であるが、深さは検出面からそれぞれ北側約50cmに対し南側約60cmと北側が相対的に浅い。

遺物は柱穴から須恵器、土師器片が若干出土している。



第19図 建物3平・断面図 (S=1/80)

出土遺物（第20図）

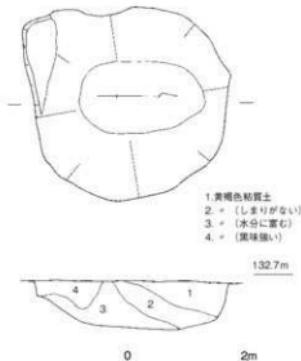
1は土師器の小皿である。底径4.6cmを測る。底部ヘラ切りで色調は黄土色を呈する。2も小皿の底部であるが、底径はやや大きく6.0cmである。濃い肌色を呈する。これ以外にも須恵器片や瓦質土器片、小皿とおぼしき土師器片が出土しているが、小片のため図示に至らない。時期はいずれも中世に属する。



第20図 建物3出土遺物 (S=1/4)

土壤1（第21図）

調査区中央北端で検出された用途不明の土壤である。長径318cm、短径305cm、深さ80cmを測り円形のプランを示す。また、底部はボウル状で、南西部分にテラス状の平坦面を有する。埋土はしまりがなく、簡易に人为的に埋められたものと思われる。遺物としては本片が出土している。時期は不明であるが、埋土から土壤2と同一時期であると判断される。



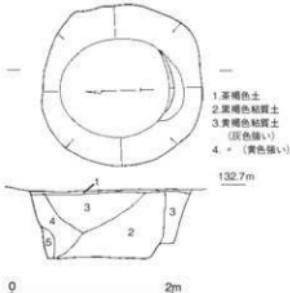
第21図 土壌1平・断面図 (S=1/80)

土壤2（第22図）

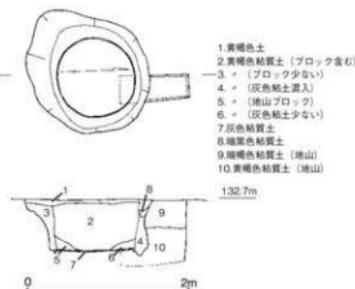
調査中央南端で検出された長径、短径とも175cm、深さ75cmを測る円形の土壤である。床面以外には南側に三日月形を呈するテラス状の平坦面を有する。土壤1と同様に埋土にしまりがなく、簡易に埋められたものと考える。遺物の出土はない。時期は不明であるが、埋土の状況から土壤3、5～6と同一時期であろう。

土壤3（第23図）

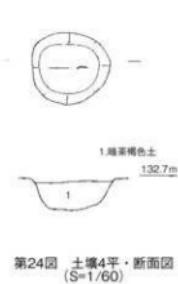
調査区南端で検出された長径153cm、短径125cm、深さ56cmを測る土壤である。底面には灰色粘土層が堆積し、除去後は円形の浅い溝が検出された。桶の痕跡と考える埋土にしまりはなく、人为的に埋められたものと考えられる。遺物はなく、時期も不明であるが、他の調査例から近世以降と考えられる。



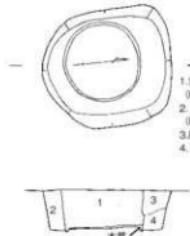
第22図 土壌2平・断面図 (S=1/60)



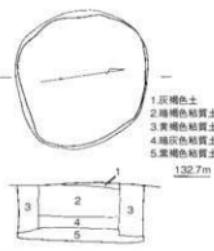
第23図 土壌3平・断面図 (S=1/60)



第24図 土壌4平・断面図
(S=1/60)



第25図 土壌5平・断面図
(S=1/60)



第26図 土壌6平・断面図
(S=1/60)

土壤4（第24図）

14年度調査区の中央付近で検出された、長径85cm、短径80cm、深さ35cmの円形の土壌である。埋土は非常によくしまっており、他の土壌とは明らかに異なる。時期は埋土から建物1と同一時期で中世に属すると判断される。遺物の出土はない。



第27図 土壌6出土遺物 (S=1/4)

土壤5（第25図）

建物1付近の調査区南端で検出された長径149cm、短径120cm、深さ45cmを測る楕円形を呈する土壌である。底面の灰色粘質土中には桶柄と思われる木質が遺存しているのが認められた。人為的に埋められ、埋土は全体的にしまりがない。時期は近世以降と思われる。

土壤6（第26図）

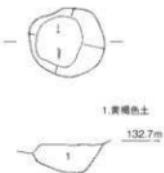
土壤5に近接して検出された、長径145cm、短径140cm、深さ65cmの土壌である。ややいびつな円形を呈する。埋土はしまりがないながらも比較的丁寧に埋められている。時期は遺物から近世以降であると思われる。遺物は陶磁器片が各1点出土している。

出土遺物（第27図）

3は陶器碗である。径9cmを測る。内外面とも乳白色を呈し、全面に釉がかかる。4は磁器の底部である。底径4.6cmを測り、内外面とも灰緑色の釉がかかる。近世以降のものであると思われる。

土壤7（第28図）

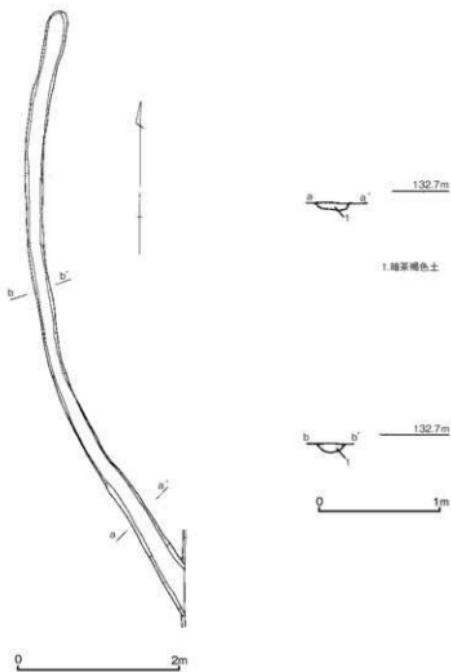
土壤2の北西に近接して検出された、長径80cm、短径75cm、深さ34cmの円形を呈する土壌である。埋土はややしまりのあるものの、付近の土壤2、土壤3とはほぼ同様であった。出土遺物はない。所属時期は近世以降のものであると思われる。



第28図 土壌7平・断面図 (S=1/60)

溝1（第29図、図版00）

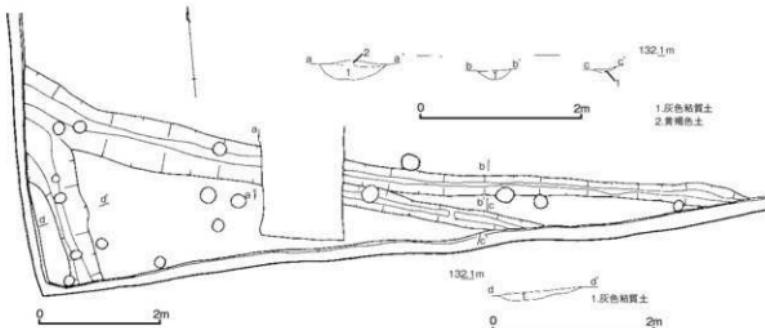
14年度調査区中央で検出された。検出された長さは85m、幅18～25cm、深さ8cm程度のごく浅い溝である。断面はごく浅いU字状を呈し、低地に向かってゆるく円弧を描く。出土遺物は須恵器の小片が出土している。所属時期は埋土および遺物から建物1、土壤4と同一時期で中世に属すると判断される。



第29図 溝1平面図 (S=1/60)、断面図 (S=1/40)

溝2 溝3（第30図）

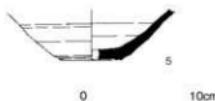
建物3の南側及び東側に検出された溝である。溝2は検出長18.5m、幅80cm～122cm、最大深さ25cmで東西方向に、溝3は検出長3.7m、幅75cm～125cm、最大深さ10cmで溝2に合流する。いずれも浅いレンズ状の断面を呈する。遺物は1点出土している。正確な所属時期は不明であるが、他の遺構との切りあい関係や埋土から判断して近世以降のものとみられる。



第30図 溝2・3平面図 (S=1/80)、断面図 (S=1/60)

出土遺物（第31図）

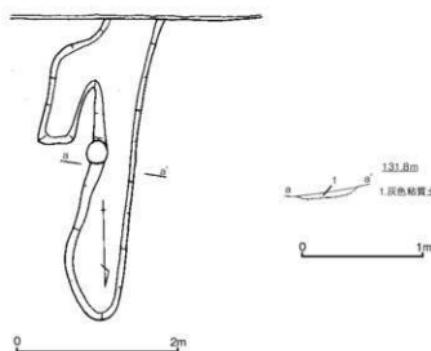
5は溝3から出土した施釉陶器の底部である。断面は須恵質で底径5cmを測り、体部は直線的に伸びる。高台は削りだし高台で、剥離が著しいものの内面と外面の一部に黄緑色の釉がかかる。



第31図 溝3出土遺物 (S=1/4)

溝4（第32図）

建物3の東側に検出された溝である。検出長3.6m、幅52cm～115cm、深さ5cmのごく浅いものである。埋土は溝2、溝3と同様で出土遺物はない。所属時期は不明であるが、埋土から溝2、溝3と同時期であると判断される。



第32図 溝4平面図 (S=1/60)、断面図 (S=1/40)

第3節 遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物は、一部ピット出土のものを除き、包含層あるいは遺構検出中に出土したものである。概ね細片で、出土量自体も合計で試掘調査と併せてもコンテナボックス4箱程度である。

遺物の所属年代はほとんどが中世に属する。これ以外に本書ではほとんど取り上げることができていないが、近世以降に属する陶磁器片や擂鉢、時期用途不明の鉄片、若干の弥生土器片、須恵器・勝間田焼片等がある。小片で図示ができないものが多く、出土量自体は土師器片が多数を占めている。

以下に図示可能なものを掲げる。

6～21は土師器の小皿である。10、17はピットからの出土である。口径6.6～8.8cm、底径5.0cm～6.4cm、高さ1.0～2.0cmの範囲に収まり、色調は黄土色もしくは橙色を示すものが多い。口径からは大まかに3グループに分かれられるようであるが、個体差も考慮に入れるべきであろうと思える。底部は6～8、19～21は回転ヘラ切り、それ以外はヘラ切りである。仕上げは外表面ともすべてナデ仕上げである。

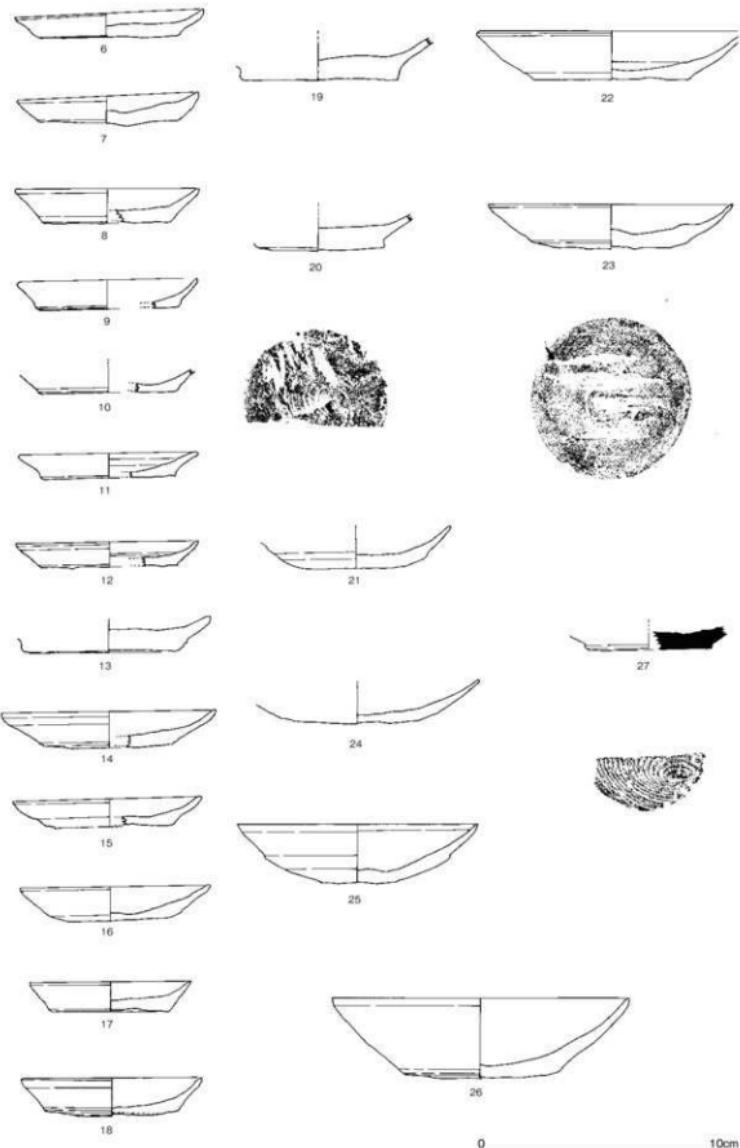
22～26は土師器皿と判断したが、杯の可能性もある個体も見受けられる。口径9.8～12.2cm、底径3.1～6.4cm、高さ1.8～3.3cmを測るが、26のみや法量が大きい。また、底部は26はヘラ切りであるが、それ以外は回転ヘラ切りである。また、色調は黄土色のものが多い。22～24はピットからの出土である。27は須恵器の底部である。底径5.2cmを測り、底部糸切りである。外表面とも灰色を呈する。器種は碗と思われる。小型の器種と考えられる須恵器片は出土が非常に少ない。

28～33は口縁部である。機種は28・30が土師質鍋、29・32は瓦質鍋、31・33は瓦質羽釜と考えられる。28～30は口縁部が「く」の字状に斜め上方へ伸びるもの、32は段をもって上方に伸びるものである。羽釜は口縁部が内傾し、鍔が斜め上方に伸びるものである。なお、焼成は28・30・31が軟質であるが、生焼けの可能性がある。それ以外は硬質で良好である。調整は28・29・33が内面ハケ目、外面ナデ、30～32が外表面ともナデ仕上げであるが、軟質のものは摩滅が著しくはつきりしない。

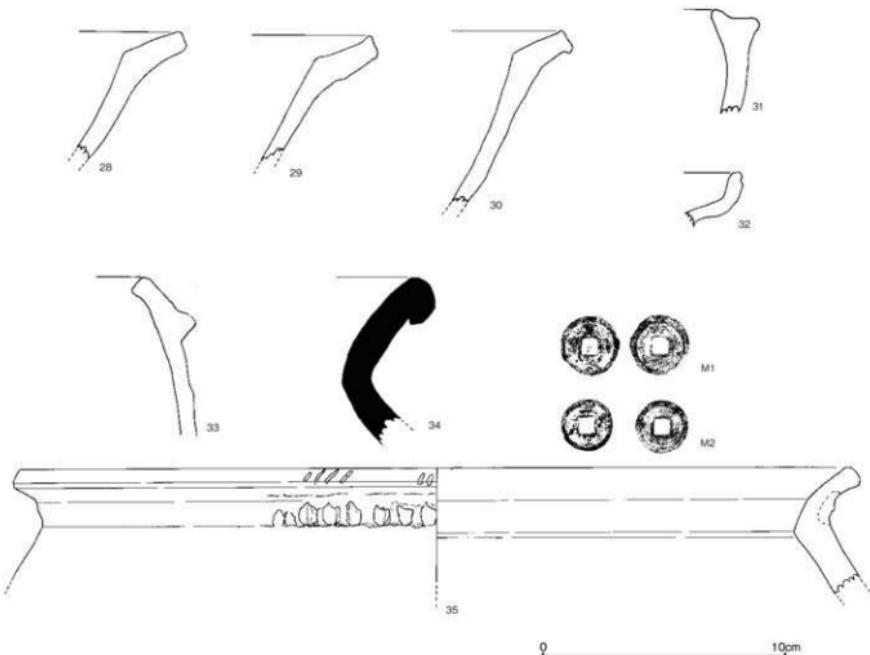
34は、須恵器甕の口縁部で、ピットからの出土である。焼成は良好で径30cm程度に復元可能かと思われる。

35は弥生土器の口縁部である。変形土器と判断した。摩滅が著しいが、口縁外部に刻目文が施され、頸部に突帯文がつく。調整は外面に一部ナデが認められるほかは観察できない。中期中葉に属すると考えられる。

M1、M2はいずれも寛永錢である。旧水田北端の畦畔部分を精査中に重なって出土し、M1は鋳化が著しい。重量はそれぞれ約1.6gと約2.1gである。



第33図 遺構に伴わない遺物（1）(S=1/2)



第34図 遺構に伴わない遺物（2）（S=1/2）

第4節 小結

せんご遺跡で検出された遺構は、建物3、溝4、土壙7である。旧来から遺物の散布等も周知されておらず、今回のは場整備事業に伴う試掘調査により所在が明らかとなった。遺構の密度は低く、残存状況も必ずしも良くなかったが、ある程度の成果をあげることができた。

本遺跡の遺構のうちで、確実に時期を押さえられるものはわずかである。特に注目されるべき遺構は建物であるが、建物については、建物1・2は出土遺物がなく、建物3は柱穴の出土遺物から中世に比定できると考えられる。ただし、遺構埋土からみると建物1・3はほぼ同じであり、建物2についてもほぼ近似することから、ごく大まかに見てこれらの建物は中世に属するものと考えておきたい。

溝については、溝1が出土遺物はないものの、先の建物遺構埋土が同様であることから概ね中世に属し、溝2～4については遺構埋土、また出土遺物から近世以降であろうと判断される。調査状況から溝2～4については自然流路である可能性もかなり高い。また、土壙については、土壙4は埋土から中世に属すると考えられる。

この遺跡の出土遺物は少なく、包含層のものがほとんどを占める。少量の弥生土器と近世以降の遺物以外は中世に属する遺物である。これらの遺物は細片が多くため具体的な時期を押えるのは困難であるが、鍋、釜類から判断して概ね13世紀代～14世紀前半の年代が与えられると思われる。

第5章 隠地東遺跡

第1節 遺跡の位置と調査の概要

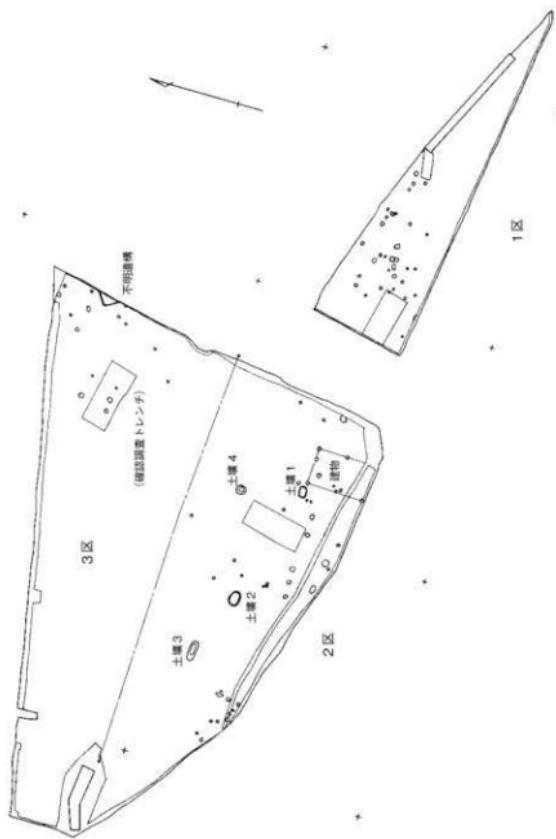
隠地東遺跡は、倭文川中～下流域の右岸に広がる沖積平野に面する。地区の大字名では、桑下地区に該当する。せんご遺跡の東端付近から倭文川はや川幅を広げるが、隠地東遺跡はこの付近から下流域の戸脇地区に至る範囲の山地末端の尾根先端部を主体とする。尾根先端から倭文川に至る低地に向けては急激に降下する地形を示し、一帯の標高は約125m～132mである。また、現在の倭文川からかなり南側（山側）に寄った平野の南端に近い部分では段丘面が認められ、この間の低地は倭文川の氾濫原である。尾根先端に接する高位部分においては小規模な窪地状の谷が存在し、これに沿って僅かではあるがやや平坦な地形を認めることができる。加えて、桑下～戸脇地区にまたがる尾根については土地の起伏がごく僅かであり、台地状の景観をなしていた。本遺跡は、前述の尾根に接する高位平坦地部分と尾根上に分布する。発掘調査区の現状は水田として利用されていた。

発掘調査は、せんご遺跡と同様に事業量との関係から、調査対象地について調査面積及び調査期間を考慮しつつ区分し、平成14・15年度の2ヵ年度で対応した。調査にあたっては、前例と同じく調査員立会いのもと重機による耕土の排土作業をおこなったのち、作業の終了後人力による遺構検出・掘り下げを行った。また、遺物包含層についても前例と同じく調査期間の短縮のため、可能な限り重機により排土を行なった。

本遺跡については、全般的に遺構密度は低く、残存度についても高位の部分は削平のため全般的にあまり良くなかった。発掘調査については、平成14年度に1調査区、平成15年度に2調査区（東・西調査区）に大別して実施したが、各調査区毎の遺構に関連性をあまり認めることができなかつたため、報告についても調査区毎に行うこととする。



第35図 隠地東遺跡調査区域図 S=1/2,500 (数字は調査年度)



第36図 14年度調査区構造配置図 S=1/400

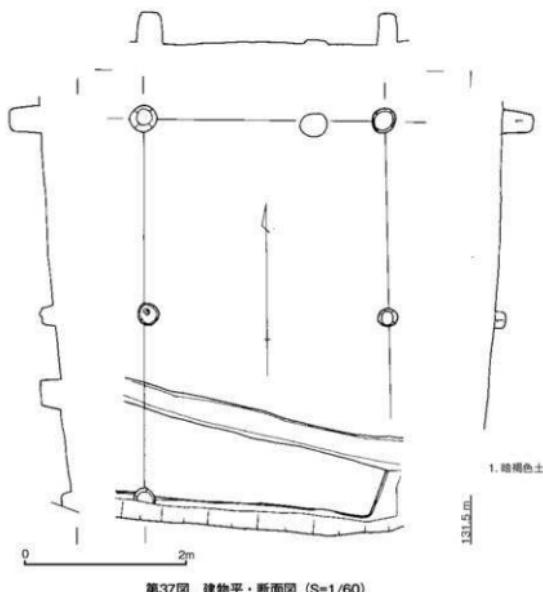
第2節 遺構と遺物

1. 平成14年度調査区

平成14年度調査区は、隠地東遺跡の発掘範囲では最高位に位置する。道路予定地を挟んで東西に調査区が跨り、また排土置場が確保できなかったため、実際の調査時には道路予定地の東を1区、西を南北に2分し南側を2区、北側を3区と便宜上区分して行なった。2区の排土は3区に行い、調査終了後2区に土を振り替えて3区の調査を行なっている。遺構は建物、土壤ほかが出土している。

建物（第37図）

調査区中央の南端で検出された桁行2間以上×梁間1間の掘立柱建物である。桁行はほぼ等高線に直行するかたちでほぼ南北方向にとられている。特に南側の柱穴の残存状況がよくないが、規模は桁行4.7m以上、梁間2.9m、桁行の柱間2.4mを測る。出土遺物は須恵器、土師器、瓦質土器が出土している。所属時期は出土遺物から中世に属するものと思われる。



第37図 建物平・断面図 (S=1/60)

出土遺物（第38図）

36は土師器小皿の底部である。調整は、摩滅が著しいが底部はヘラ切り、内外面ともナデであろうと思われる。その他には弥生土器や瓦質鍋の小片の出土をみている。



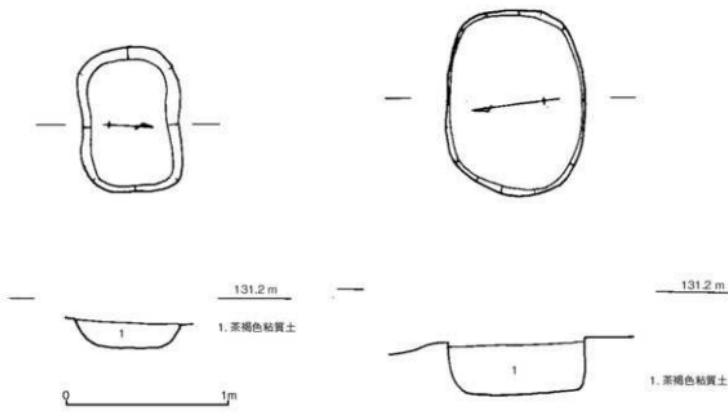
第38図 建物出土遺物 (S=1/2)

土壤1（第39図）

建物の北西に隣接して検出された土壤である。長径88cm、短径59cm、深さ17cmを測り隅丸方形のプランを示す。埋土はややねばく、若干の礫が含まれていた。遺物としては弥生土器、小皿とおぼしき土師器の小片等が出土しているが、図示に耐えるものはない。時期は出土遺物から中世に属するものと判断される。

土壤2（第40図）

調査区の中央南端で検出された長径115cm、短径85cm、深さ20cmを測る楕円形の土壤である。床面はほぼ平坦で、埋土は土壤1と同様である。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器が出土している。所属時期は出土遺物から中世に属するものと思われる。



第39・40図 土壌1・2平・断面図 (S=1/30)

出土遺物（第41図）

37、38は弥生土器の脚部である。37は短部に刻み目文が残り、外面タテハケののちナデ、内面ナデである。38は内外面ともナデ調整である。39は口縁部である。40は土師質鍋の口縁部である。段をもってのち上方に伸びる。内外面ともナデ調整である。

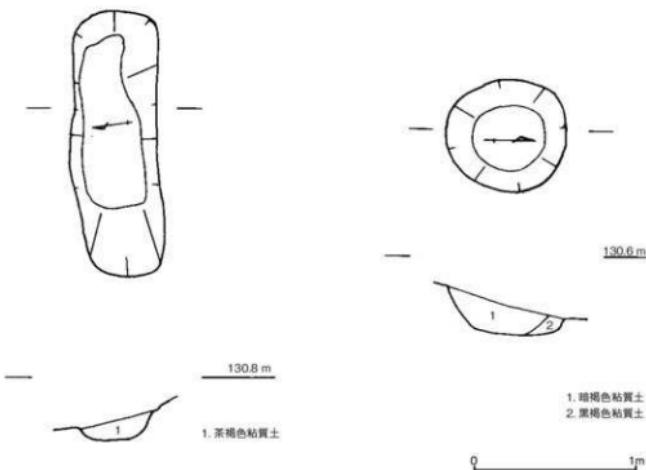


第41図 土壌2出土遺物 (S=1/4)

土壤3（第42図）

調査区南半で検出された長径161cm、短径57cm、深さ18cmを測る土壤である。遺物は床面から若干高い位置で備前焼窯の体部の破片が出土した。所属時期は遺物や他の調査例から中世に属すると思われる。

土壤4（第43図）

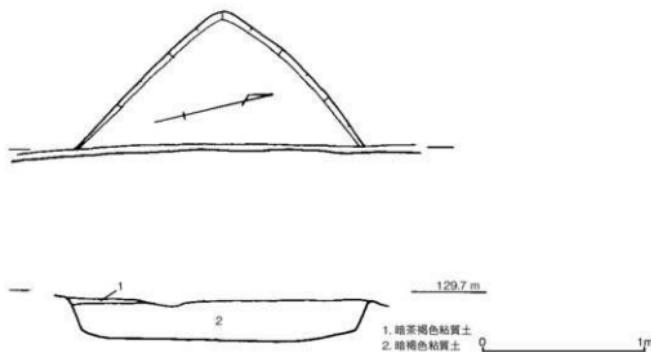


第42・43図 土壌3・4平・断面図 (S=1/30)

調査区南半で検出された、長径74cm、短径70cm、深さ19cmを測る円形の土壤である。埋土は非常に水分に富む。遺物の出土はないものの、時期は埋土から中世に属すると判断される。

不明遺構（第44図）

調査区北端にて検出された。約90度の角度を持ち方形状のプランを示す。深さは検出面から約30cmで、ほぼフラットな底面を持つ。埋土自体は他の遺構に近似するが、時期、性格とも不明である。遺物は出土しなかった。

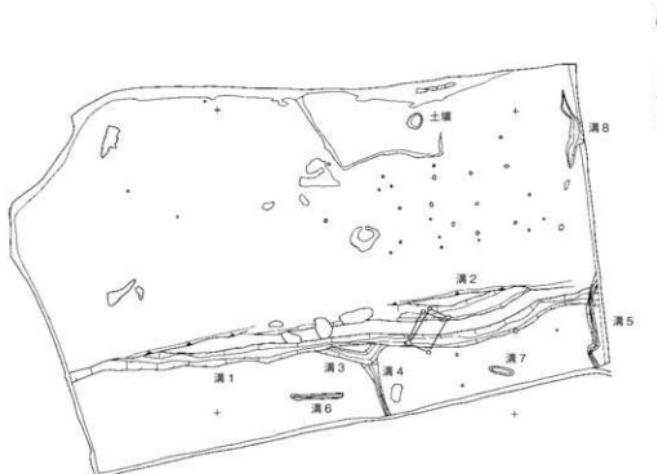


第44図 不明遺構平・断面図 (S=1/30)

2. 平成 15 年度東調査区

平成 15 年度調査区は、平成 14 年度調査区の北隣の低位部分において 1,340 m²、また谷を挟んで東の台地上において 1,200 m² の合計 2,540 m² が発掘調査対象となった。直線距離にして 150m 以上はなれていたため、便宜上東調査区、西調査区に区分して調査を行なった。

東調査区においては建物（未成を含む）2 棟、土壙、溝などが検出された。



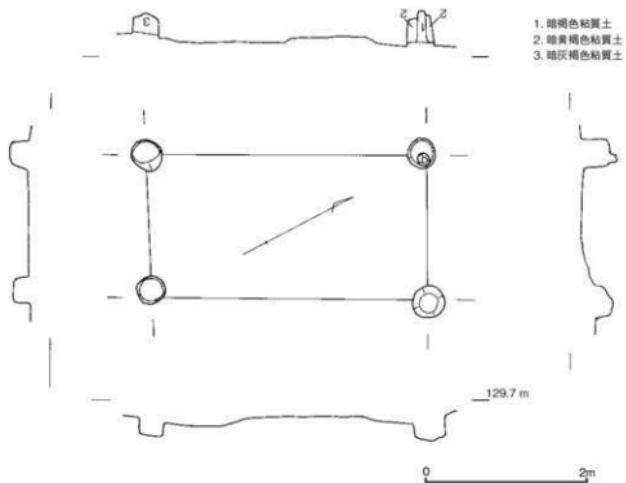
第45図 15年度東調査区遺構配置図 (S=1/400)

建物 1（第 46 図）

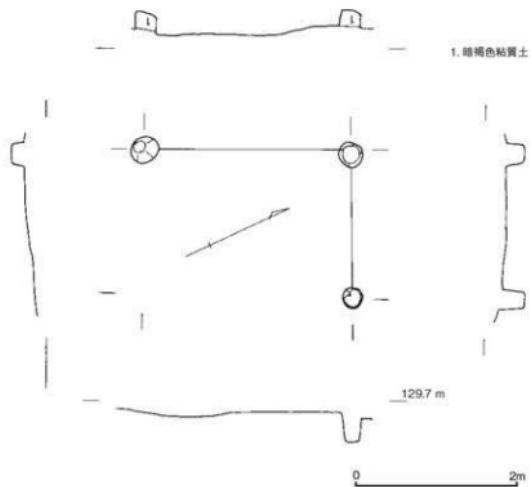
調査区南半中央よりに検出された桁行 1 間 × 梁間 1 間の掘立柱建物である。建物 2 と重複するが、新旧はわからない。桁行はほぼ等高線に並行するかたちで北から約 30 度東に振られている。溝 1、2 に切られていることから部分的に柱穴の残存状況がよくないが、規模は桁行 3.4m、梁間 1.7m を測る。出土遺物はない。所属時期は不明であるが、埋土から中世に属すると考えられる。

建物 2（第 47 図）

建物 1 と重複し、かつほぼ並行する掘立柱建物である。規模は桁行 1 間 × 梁間 1 間の建物と思われるが、ひとつの柱穴が検出できなかったことから未成と判断した。建物 1 と同じく溝に切られていることから柱穴の残存状況が一部よくないが、規模は桁行 2.6m、梁間 1.8m を測る。柱穴から土師器片が出土している。所属時期は出土遺物から中世に属するものと考える。



第46図 建物1平・断面図 (S=1/60)



第47図 建物2平・断面図 (S=1/60)

土壤（第48図）

調査区北端で検出された土壤である。長径140cm、短径114cm、深さ18cmを測る卵形の土壤である。底面は若干の凹凸があり、埋土はやや水分に富む。出土遺物はない。時期は不明であるが、埋土の状況から比較的新しいものと考える。

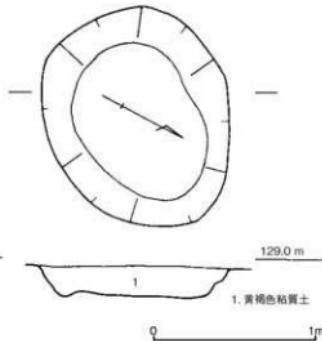
溝1 溝2 道路状遺構（第49図）

溝1、溝2は調査区南半を東西方向にやや弧を描きながら並行に走る溝である。現水田により上面が削平されており、特に溝2は遺構の残存状況が良くないが、検出延長は溝1で約45mである。

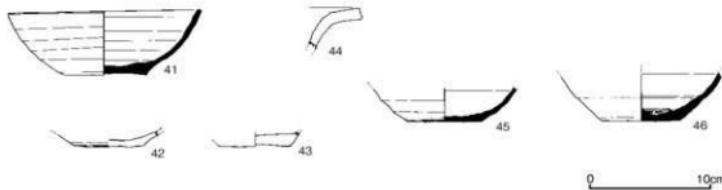
そして、深さは5～10cmを測りレンズ状の断面を示し、建物1、建物2、溝3を切る。出土状況と埋土からこれらの溝は対であると判断した。この溝からは、弥生土器、土師器、須恵器、モモ科と考えられる種子などが出土している。また、溝に挟まれた部分は、幅0.7m～1.2mを測る。黄褐色を呈し、中央が平坦もしくは僅かにカマボコ状に高くなっている。たたき締められたように固い状況が確認された。また、断面においても2～5cmの厚さで前述の層が認められ、若干の土器片や小礫が含まれている。この部分については、その性格を判することは困難で半ば推測であるが、溝とセットで捉えることができるのであれば可能性として道路等の用途があげられるのではないかと思われる。なお、時期については、やや疑問があるが、溝1、溝2については出土遺物からひとまず中世としておきたい。

出土遺物（第50図）

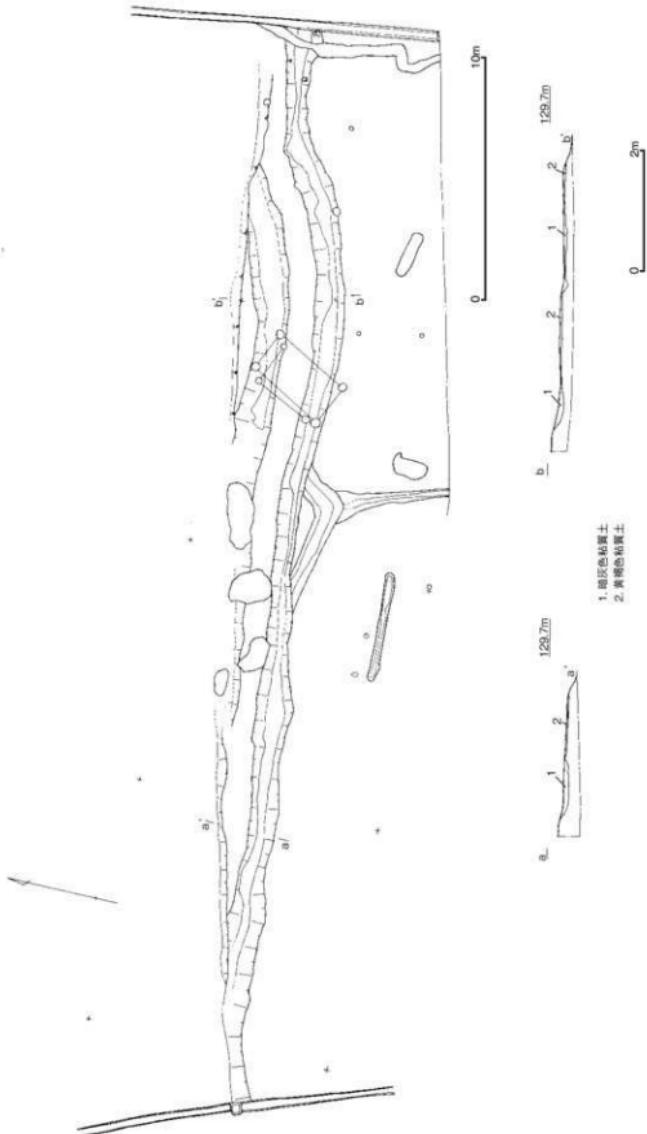
41～44は、溝1から出土した。42は勝間田焼の椀である。口径15.8cmを測る。42・43は土師器小皿の底部であるそれぞれ底径5.8cm、5.7cmを測る。44は弥生土器の口縁部である。摩滅が著しいが内面に3条の凹線を認める。45・46は溝2からの出土で、勝間田焼の椀底部である。底径はそれぞれ6.5cm、6.5cmを測る。いずれも勝間田焼編年のⅡ期に相当すると考えられる。このほか、溝1と溝2の中間に高まりからは勝間田焼椀の口縁部や土師器小皿の底部の小片が出土しているが、図示に至らない。



第48図 土壠平・断面図 (S=1/30)



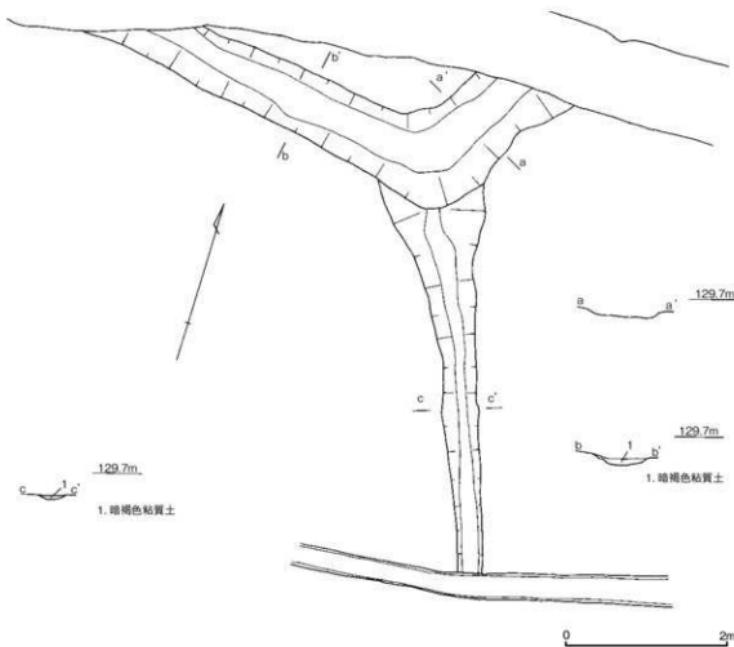
第50図 溝1・2出土遺物 (S=1/4)



第49図 満1・2道路状造構平・断面図 (S=1/200, S=1/80)

溝3 溝4 (第51図)

溝3は最大幅122cm、深さ15cmを測るレンズ状の断面を示す溝で、溝4に接する箇所で屈曲する。また、溝4は最大幅120cm、深さ10cmを測る溝である。同じくレンズ状の断面を示す。溝3は溝1に切られているが、溝3と溝4の新旧関係は不明で、同時期に並存した可能性もある。出土遺物は弥生土器の小片が出土地しているが、図示に至らない。これらの溝は埋土から中世に属すると思われる。



第51図 溝3・4 平・断面図 (S=1/60)

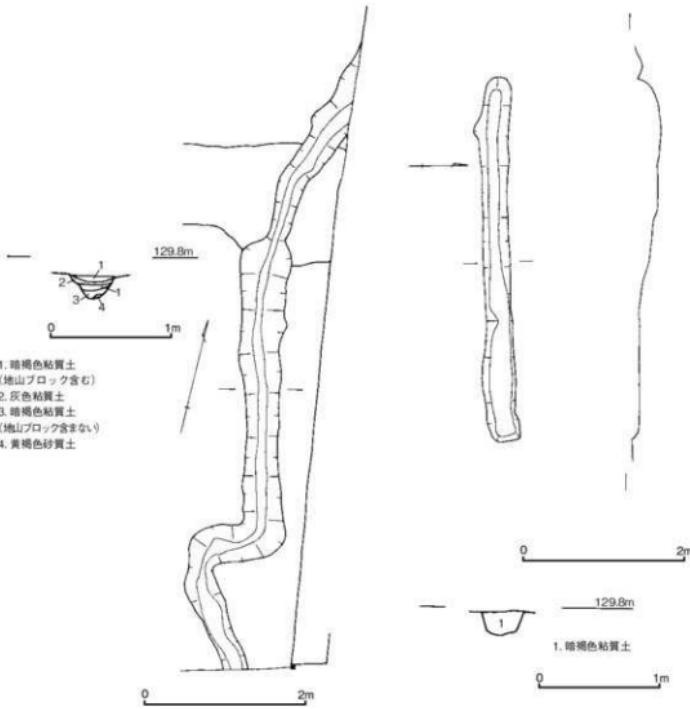
溝5 (第52図)

調査区東端で検出された最大幅55cm、深さ20cm程度の溝で不定形な平面形を示し、不規則に蛇行する。溝1との切りあい関係は不明である。埋土中に須恵器の小皿を含むが、その形状や断面の状況から中世の自然流路であると考える。

出土遺物 (第53図)

47は勝間田焼小皿の口縁部である。形態から12世紀代かと思えるが断定できない。





第52図 溝5平・断面図 ($S=1/60$ 、 $S=1/40$)

第54図 溝6平・断面図 ($S=1/60$ 、 $S=1/40$)

溝6（第54図）

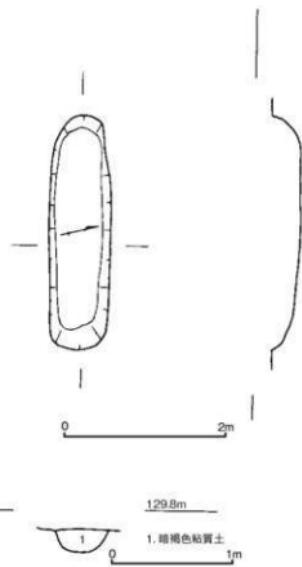
長さ4.5m、幅25cm、最大深さ35cmの東西に走る溝である。底面の深さは一定しない。埋土は全体的に水分に富みかなり粘度が高い。炭・弥生土器片を若干含むが、遺構の時期としては埋土から中世と考える。

溝7（第55図）

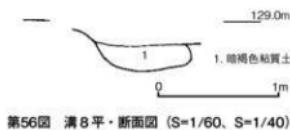
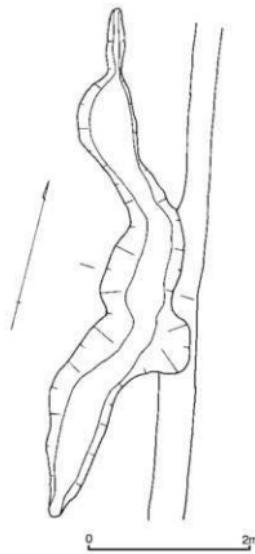
長さ1.95m、幅52cm、最大深さ25cmの溝である。底面は北西に向かって低くなる。埋土は溝6と同様で水分に富み、粘度が高い。出土遺物はないが、遺構埋土から溝6と同じ時期と判断される。

溝8（第56図）

溝5と同じく調査区東端で検出された最大幅130cm、最大深さ25cm程度の溝で不定形なプランを示し、不規則に蛇行する。埋土中に弥生土器の小片をごくわずか含んでいたが、その形状や断面の状況から中世の自然流路であると考える。



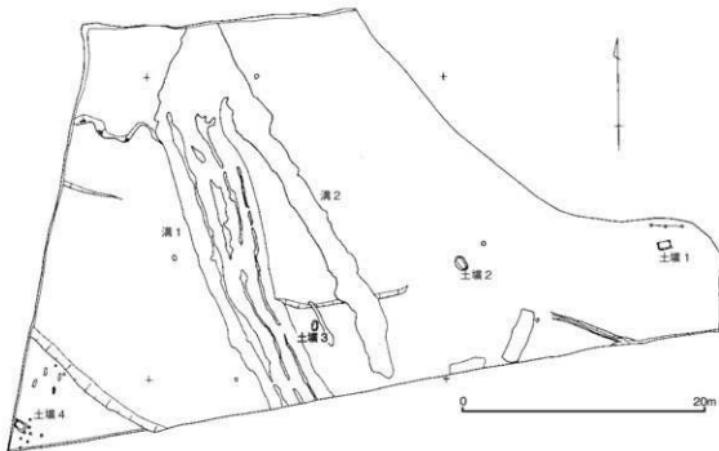
第55図 溝7平・断面図 ($S=1/60$, $S=1/40$)



第56図 溝8平・断面図 ($S=1/60$, $S=1/40$)

3. 平成 15 年度西調査区

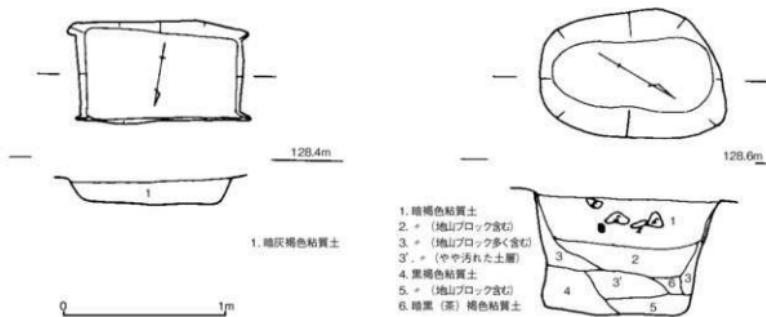
西調査区においては、土壌、溝、ピット列などが検出された。遺構密度は低いものの、確認調査の際に検出されていた溝が調査区を縱断し、埋土から弥生土器等の多量の遺物の出土をみたことが特筆される。



第57図 15年度西調査区遺構配置図 (S=1/400)

土壌 1 (第 58 図)

調査区東端において検出された方形の土壌である。長径 100cm、短径 60cm、深さ 18cm で、四隅に突出部を持つ。床面はほぼ平坦である。出土遺物はない。時期は不明であるが、遺構埋土の状況から比較的新しい時期のものとみられる。



第58・59図 土壌 1・2 平・断面図 (S=1/30)

土壤2（第59図）

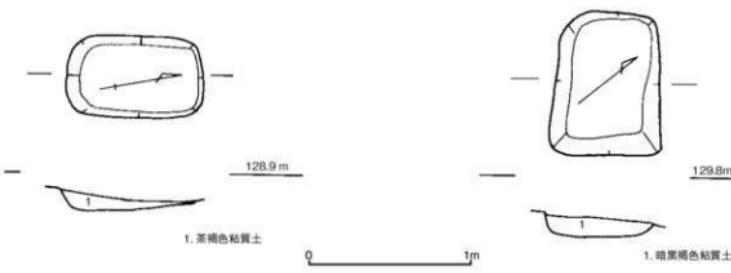
長径112cm、短径78cm、深さ70cmを測る楕円形の土壤である。断面はやや下部で袋状に広がり、下層埋土は特に水分に富む。上層の茶褐色粘質土から弥生土器片が出土しているが図示できない。遺構の所属時期は不明であるが、埋土から溝1、溝2と同じ時期と考えられる。

土壤3（第60図）

長径83cm、短径50cmを測り隅丸方形のプランを呈する、深さ5cmとごく浅い土壤である。出土遺物はなく、所属時期は不明であるが、埋土から後述の溝1、溝2と同時期と判断される。

土壤4（第61図）

長径90cm、短径65cm、深さ6cmの方形のプランを呈する土壤である。出土遺物はなく、所属時期についても不明である。



第60・61図 土壌3・4平・断面図S=1/30)

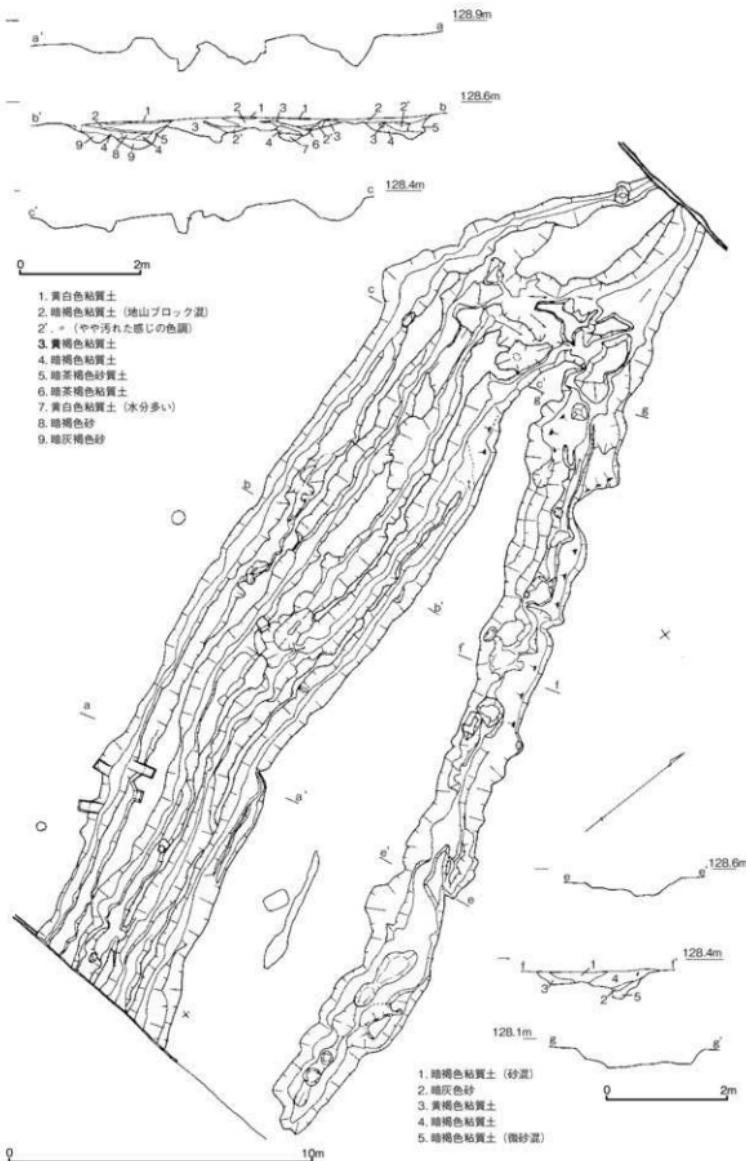
溝1 溝2（第62図）

調査区を南北に流れる溝である。旧地形からみると南から北向きに開く谷の最深部にあたる。検出総延長は溝1が32m、溝2が32.6mを測り、また幅は溝1が6m、溝2は2.6m程度で、調査区北端で合流する。溝1は内部で4条～5条に分岐しており、それが緩いV字形の断面を示し、溝2は深い皿状の断面を示す。溝1、溝2とも平面・断面共に不定形で、周辺の地形からも人工的な溝という結論に至らず、自然流路と判断した。この溝からは、弥生土器を主とした多量の遺物が出土した。

出土遺物（第63～65図）

出土遺物が多量であるため、器形のわかるものを優先した。48～81は溝1の出土である。48～58は口縁部である。48～50は漏斗状に開くもので、頭部に貼り付け突帯がつく。円形浮文が施される固体もある。51・52はラッパ状に開くもので、縁部はやや肥厚している。52では上面に櫛搔波状文が施される。53は縁部に四線文を持つものである。54・55は縁部上面に円形浮文が施され、外面を突帯の上に粘土紐を貼り付けて加飾している。55では胴部に刺突文がみられる。

56～58・60は菱形土器である。58では縁部に四線文の上に連続刺突文が施される。59は菱形土器



第62図 溝1・2平・断面図 (S=1/160 S=1/80)

の胴部である。最大径 25.6cm を測る。外面上半は最大径付近までハケメ調整の上に櫛描波状文、8 条の櫛描直線文、櫛描波状文、8 条の櫛描直線文と繰り返される。下半はヘラミガキである。また、内面はハケメ調整である。61 は蓋形土器の胴部以下である。

62～66 は胴部～底部である。62 には煤が付着し、64 では胴部に連続刺突文が施される。65 では若干底部が上げ底となっているのが観察できる。調整は概ねヘラミガキであるが、65 ではハケメである。66 は焼成後底部に 1 箇所穿孔されている。67 は蓋形土器である。出土は 1 点のみで、調整等は摩滅のためはつきりしないが、底部はナデである。2ヶ所の穿孔が確認できる。68 は頭部～胴部である。頭部に凹線文が認められる。69・70 は脚柱部である。70 では内面にシボリ痕がみられる。

71～73 は高杯である。71 はナデ、72・73 はハケメもしくはヘラミガキである。74～81 は脚部である。74 では長方形の透かしが認められ、77 では円形透かし、79 では三角形の透かしが認められる。78 は透かしの間をハケメ調整のうち、その部分をダイヤ形に残し、他の部分に斜線で加飾している。脚端部外側は凹線文に加えて、円形浮文と刺突文を施す。80 では凹線文に加え、簡易な銀歯文が施されている。

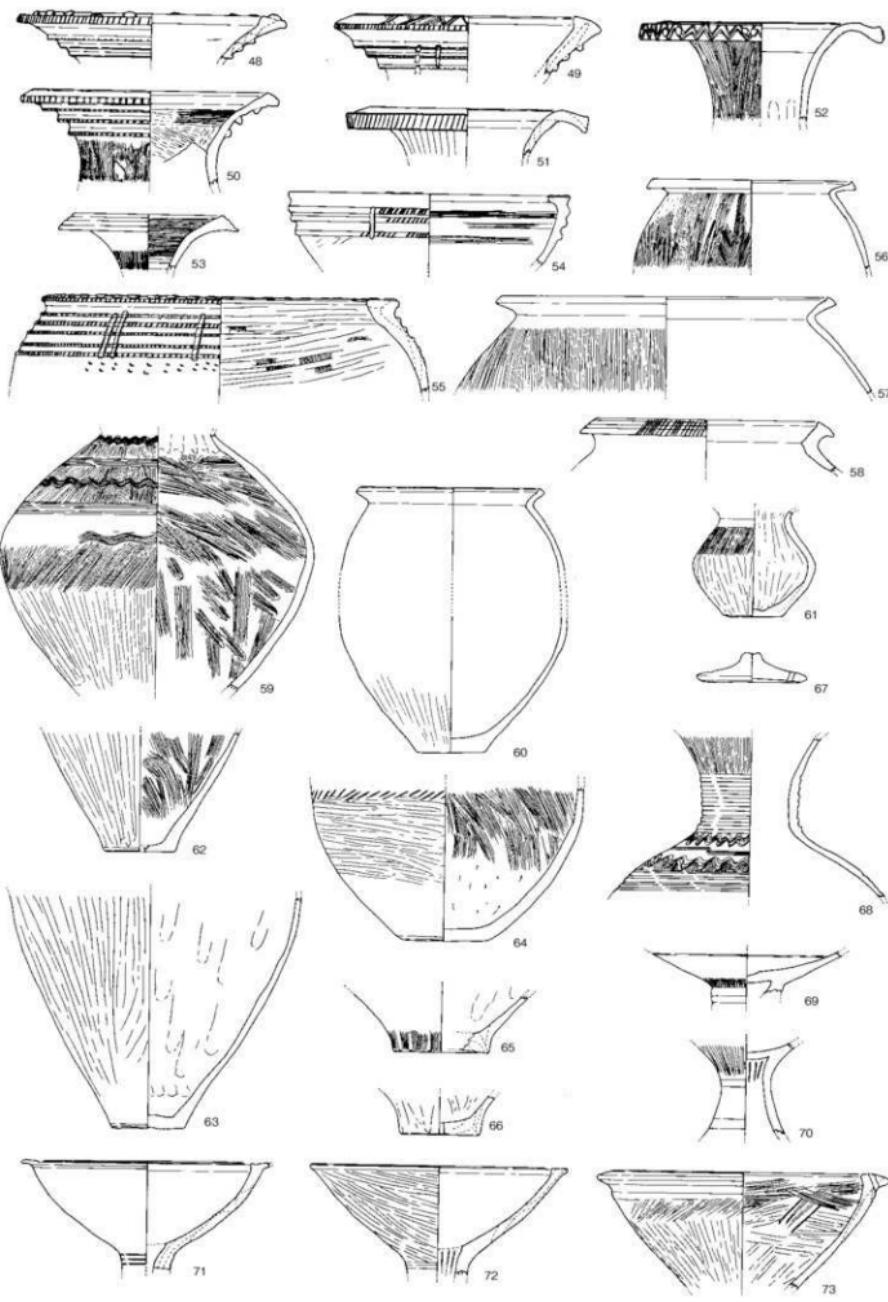
82～107 は溝 2 からの出土遺物である。溝 1 の出土遺物と特に異同はないが、縄文土器の出土が特筆される。82～96 は口縁部、97～101 は底部、102～104 は高杯部から脚柱部、105～108 は脚部である。88 は上面に 2 連の突帯がつき、その外面に 2 連の波状文、端部外面に連続刻目文と円形浮文が施される。なお、上面 2 連の突帯間に 2 個を単位として穿孔が 3ヶ所残存する。また、89 では 5 個を単位とする連続列点文が 3 段にわたって確認できる。96 には口縁端部に凹線が認められる。高杯 102・103 では 2 個の穿孔が確認できる。105 はミニチュア土器と思われる。

109・110 は縄文土器である。いずれも口縁部で深鉢形を呈する。109 は外面に同心円文、110 では口縁部内面に刺突文、外面に突帯文がつく。いずれも小片であるが、後期～晩期に相当すると考える。

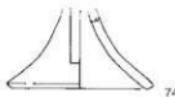
111～113 は分銅形土製品である。111 は上半部から抉り部にかけてある。縦 4.2cm、横 5.2cm、最大厚さ 1.1cm の破片である。抉り部に沿って 5 条の櫛描文と両側に刺突文を組み合わせた文様、また上半部及び抉り部にも刺突文が施される。上半部の刺突文は 2 重である。112 は部位不明の破片である。縦 3.6cm、横 3.7cm、最大厚さ 1.4cm を測り、3ヶ所に弧状の刺突文が描かれる。113 は上半部の破片と判断した。縦 4.3cm、横 8.3cm、最大厚さ 1.8cm を測り、9ヶ所の穿孔が確認される。調整は摩滅が著しいが、刺突文の痕跡が一部残る。

114～116 は土製紡錘車である。114 は縦 6.5cm、横 6.3cm、最大厚さ 2.7cm、114 は縦 5.5cm、横 4.6cm、最大厚さ 0.7cm、115 は縦 5.7cm、横 5.8cm、最大厚さ 0.9cm をそれぞれ測る。115・116 は内外面ともハケメの痕跡が残る。116 以外は溝 1 の出土である。

S 1～S 9 は石製品である。全て溝 1 からの出土である。S 1～S 3 は磨製石包丁の破片である。S 1 は縦 4.8cm、横 5.9cm、最大厚さ 0.9cm で穿孔部分から欠損している。S 2 は縦 3.4cm、横 7.8cm、最大厚さ 0.6cm で約 50% の残存と思われる。S 3 は縦 4.3cm、横 8.1cm、最大厚さ 1.1cm の残存であるが、表面の状態が粗いため未成品の可能性がある。S 4 は摩石と判断した。縦 7.3cm、横 8.2cm、最大厚さ 4.2cm である。重量 450g を量る。S 5 は磨製石斧の刃部である。縦 8.1cm、横 7.3cm の残存である。最大厚さ 5.5cm で重量 510g を量る。S 6 は環状石斧片である。径 8.9cm、最大厚さ 2.5cm を測り、1 部欠損があるものの非常に精良に磨かれている。全体の約 60% の残存である。S 7・S 8 は何らかの未成品であると判断した。S 7 は縦 4.3cm、横 10.2cm、最大厚さ 1.1cm、S 8 は縦 4.1cm、横 17.7cm、最大厚さ 1.6cm をそれぞれ測る。S 9 はサスカイト製の石鎌である。欠損しているが、全長 2.6cm を測る。その他にも若



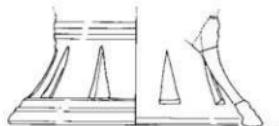
第63図 满1・2出土遺物(1) (S=1/4)



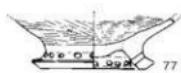
74



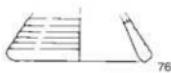
75



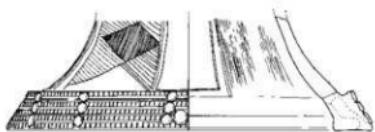
79



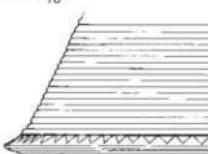
77



76



78



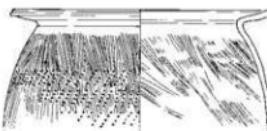
80



81



82



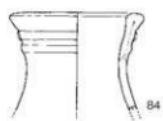
89



90



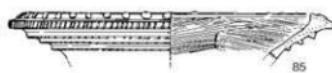
83



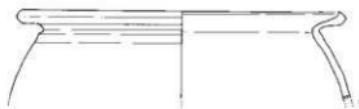
84



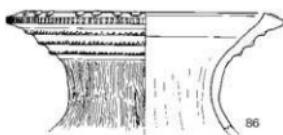
92



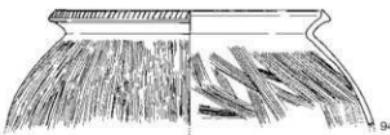
85



93



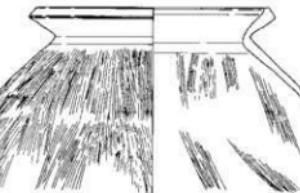
86



94

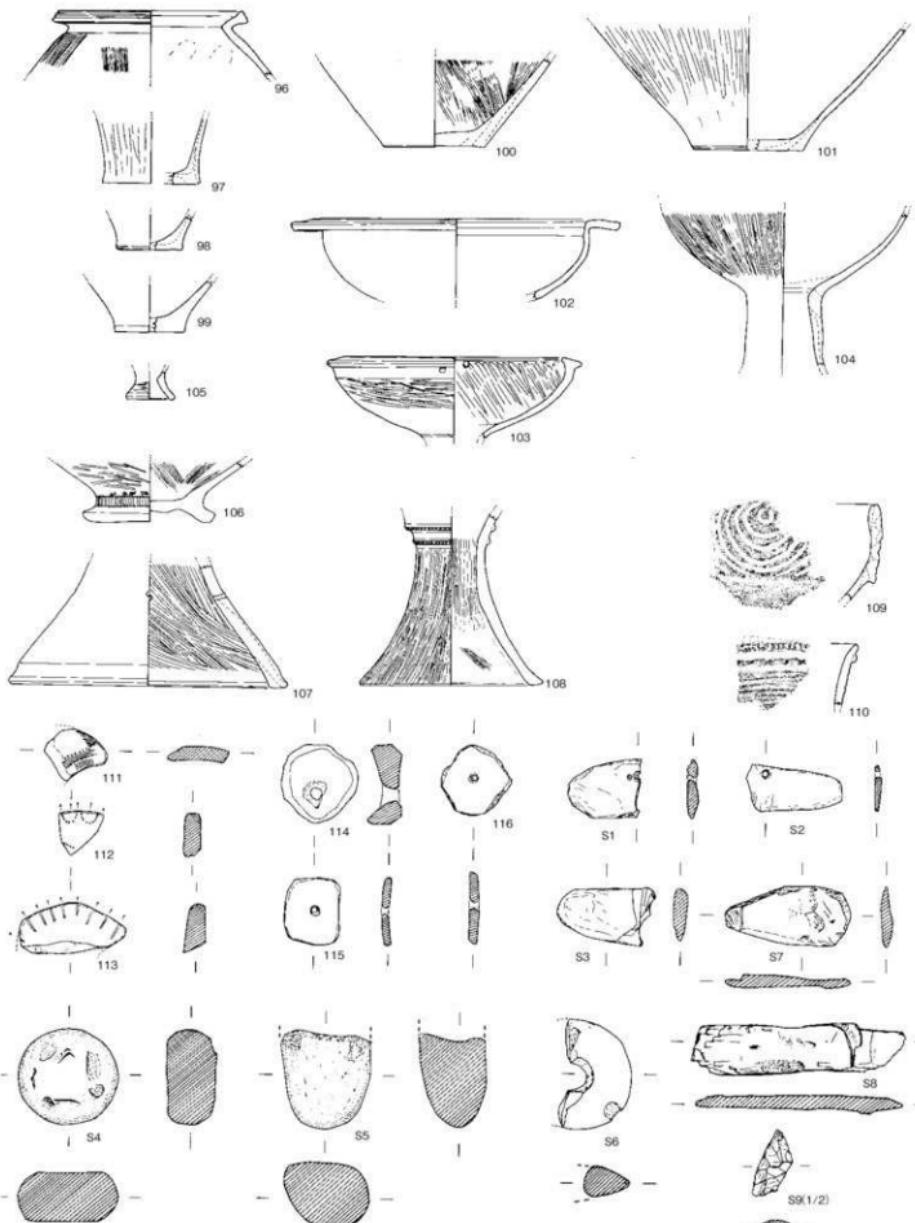


87



95

第64図 溝1・2出土遺物(2) (S=1/4)

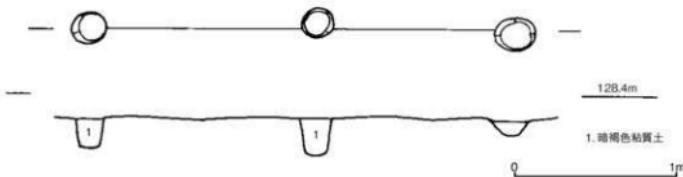


第65圖 滇1·2出土遺物 (3) (S=1/4 S=1/2)

千の剥片が出土している。

ピット列（第66図）

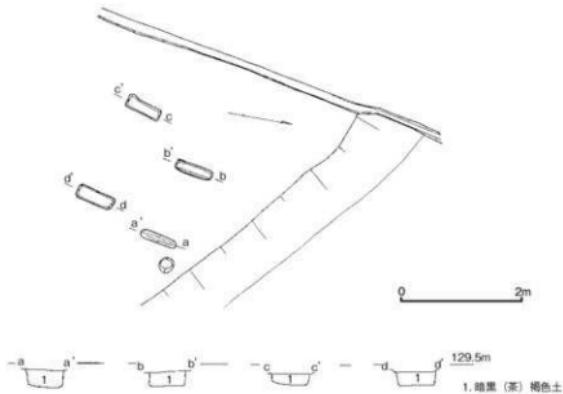
土壤1の北よりで確認されたピット列である。それぞれのピットは、径20～26cm、深さ5～22cmの規模のものである。遺構埋土は土壤1とよく似ており、時期的にも近いものと思われるが、詳細な時期はわからない。遺物の出土はない。



第66図 ピット列平・断面図 (S=1/30)

方形ピット（第67図）

調査区南西隅で検出された方形のピットである。確認されたのは4で、いずれも長さ30～35cm、幅10cm程度、深さ20～30cmの長方形である。弥生土器片の出土をみているが時期、性格ともに不明である。なお、埋土については、土壤4に近似することが指摘できる。



第67図 方形ピット平・断面図 (S=1/80)

第3節 遺構に伴わない遺物

包含層あるいは遺構検出中に出土したものである。一部ピット出土遺物を含む。出土量は合計でコンテナボックス6箱程度である。遺物の所属年代は弥生時代から現代まで多岐にわたる。出土品は弥生土器、中世土師器が多数を占めるが、それ以外に少量の鉄滓や種子の出土をみている。本稿では器形のわかるものを主としてとりあげる。

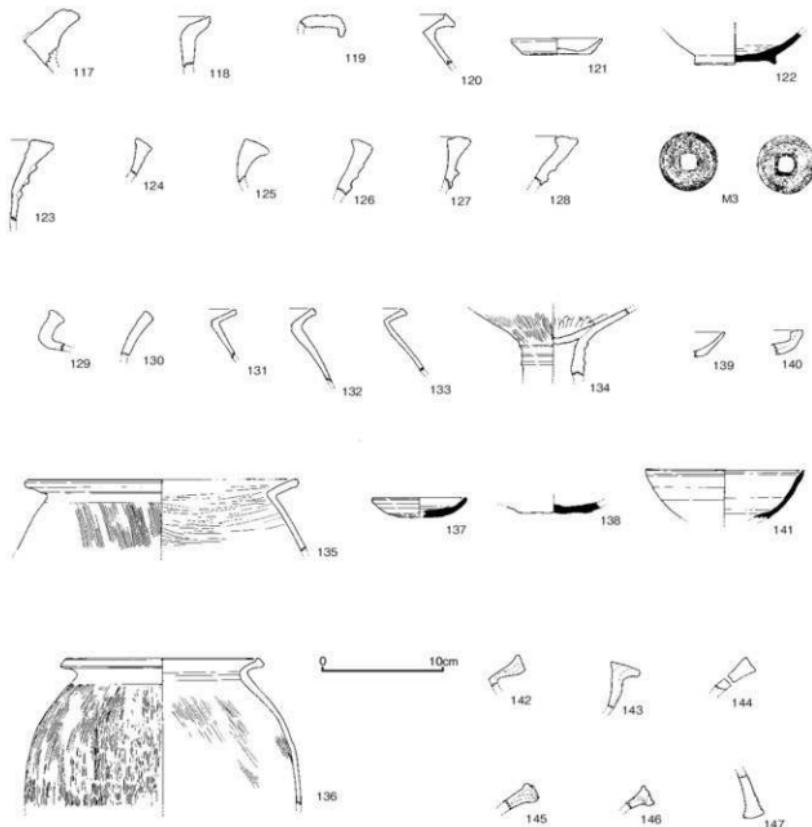
117～150は、14年度調査区の出土である。117～120、123～133、135～136、142～146、148・

149は弥生土器の口縁部である。壺形土器もしくは壺形土器が多数であるが、小片のため器種不明のものもある。135は外面ハケメ、内面ヘラミガキ調整で、136では内外面ともハケメである。134は脚柱部、147は脚端部である。いずれも中期の範囲で捉えることができると考える。

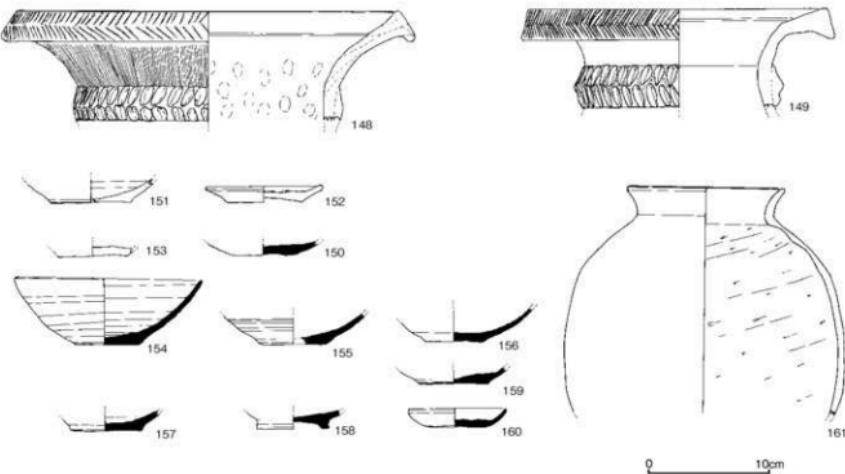
121・139は土師器小皿である。121は口径7.4cmを測る。122・138・141・150は勝間田焼の碗または底部である。137は同小皿で口径7.6cmを測る。底部は121のみヘラ切りで、それ以外は糸切りである。140は瓦質鍋の口縁部である。

151～160は15年度調査区の出土である。151～153は土師器皿、154は勝間田焼碗である。口径15.3cmを測る。155～159は勝間田焼碗または底部である。160は勝間田焼小皿である。これ以外にも甕等の破片が出土している。161は西調査区溝1北端付近の造成土から出土した土師器壺である。

M3は14年度調査区2区の造成土中から出土した。造成時期を推定する手がかりとなるものである。



第68図 遺構に伴わない遺物（1）（S=1/4 S=1/2）



第69図 遺構に伴わない遺物（2）（S=1/4）

第4節 小結

隠地東遺跡で検出された遺構は、総数で建物3、溝8、土壙9、その他4で、遺構の密度としてはごく粗いものであった。検出遺構のうち、建物については埋土と出土遺物から全て中世と判断した。13年度調査区で検出された1棟が1間×2間以上の規模が想定できるほかは、1間×1間のごく小規模なもの（1棟は未成）である。出土遺物がわずかのため、詳細な時期の特定に結びつかないが、中世という枠の中でとらえておきたい。

溝については、15年度東調査区で確認されたものは中世と判断したが、これも多くの場合は埋土からの判断に頼っている部分が多く、弥生土器を埋土中に含んでいるものもある。また、性格についても判断できかねるものが多い。15年度西調査区の溝1、溝2は自然流路と判断した。この溝の時期については、弥生中期の土器を主とする遺物が多量に出土しており、他の時代の遺物がみられないことと、中世の遺構とは明らかに埋土が異なることから、一応の結論として弥生時代という時期をあてたい。

また、これら遺物は、今回の調査では遺構が確認できなかったが、付近に弥生時代の集落が所在したこととを示唆するものであると考える。

土壙についても不明な点が多い。多くは時期を中世としたが、15年度西調査区の土壙2については埋土から弥生時代の可能性がある。判断ができないものについては時期不明とせざるを得なかった。

その他の遺構についても同様で、不明なものが多く見受けられた。

また、出土遺物からみると、弥生土器については、先に触れた溝以外にも全調査区において包含層やピットから出土をみている。時期的には判別できるものは中期がほとんどである。確認調査の項でも触れたが、今次の調査地については旧地形の変更が著しく、現在の地形が必ずしもかつての地形を示していない場合が多い。今次の調査では中世以後の遺構の検出にとどまったが、それ以外の時期の遺構が当該地域に所在したことに対する傍証となると思われる。

第6章　まとめ

本書掲載のせんご遺跡・隠地東遺跡で検出された遺構は、建物6、溝10、土壙16、その他4である。先に述べたとおり、調査区毎における遺構の関連性をあまり認めることができない状況で、また部分的な調査区設定が多く、このなかでなんらかを述べるのは困難であるが、周辺の遺跡等を参照しつつ現時点で述べ得ることを述べてみたい。

遺跡の占位について

せんご遺跡・隠地東遺跡の発掘調査において検出された遺構は概ね中世のものと判断したことは前述したとおりである。この地区における当該期の発掘調査は、本書掲載の遺跡に先立って調査を行なった戸脇地区的稗田遺跡・半太遺跡・久保田遺跡がある。これらの遺跡は、若干の時期差は考えられるものの、いずれも尾根上の微高地または段丘上に占位する状況を示している。翻って、せんご遺跡・隠地東遺跡でみると、両遺跡とも位置的な条件はほぼ同様であり、高位段丘上若しくは尾根上に占位するという状況がみられる。現在の倭文川周辺の低地がほぼ氾濫原であり、遺跡の所在が不明であるという条件つきで、調査遺跡からみる限りでは似通った傾向であることが指摘できる。

ただし、せんご遺跡については、北向きながらも倭文川を含む低地や交通路を俯瞰できる位置にあり、集落等の存在は充分考え得るものと推測するものの、より活動に適した地は倭文川の北側と考えられることと、地形的な条件からあまり規模的に大きな集落は考えにくく、遺構及び遺物の時期や出土状況から見る限り、遺跡の存続期間としては限定的なものであると推測される。

なお、これら遺跡は今日の農村集落とは重複して所在する。この地区における当時の集落形態がどういったかたちを示すのかはわからないが、倭文川が低地を流れ、その流域に狹小な平野が広がるという地形的な条件から、現時点では適地が限定された結果であるとみておきたい。

検出遺構について

検出遺構からみると、本遺跡の遺構のうちで着目されるべき遺構は建物であるが、これらの建物についても、前述のとおりごく大まかに見てこれらの建物は中世に属するものと考えておきたい。建物の性格については、特徴づける遺物の出土もなく現時点ではわからない。戸脇地区においても規模の大きい建物が検出されているが、詳細がわからないこともあり、類似性その他は指摘できない。今後の課題としたい。

溝や土壙については、土壙は近世以降のものが多く、隠地東15年度西調査区の土壙2のみ弥生時代の可能性が指摘できる程度である。この遺構についても、検出状況としては所謂落とし穴の形状を示すが、当該期の遺構についてこれ以外は皆無であるため指摘する程度に留まる。溝は1部近世以降のものを除き大部分を中世としたが、断片的な検出状況から結論を導くのは困難である。隠地東遺跡15年度東調査区の溝1・2についてはセットで検討し得る可能性がある程度である。

出土遺物について

出土遺物は、縄文～近現代に至る幅広い時期に渡る遺物が出土した。遺構の数自体が少ないとあ

り、直接遺構に結びつくものは非常に少ないが、中世の遺物は日常使用されるものであり、このことからも出土遺構の性格を推し量ることができる。隱地東15年度西調査区出土溝1・2出土の縄文時代遺物は自然流路中の2点のみである。また、これらの溝では、弥生土器を主とする遺物が多量に出土した。出土土器の時期は中期中葉に収まるものが多くを占めるが、いくらか時期の幅があり、中葉の中でもやや古相を示すもの、あるいは中期後葉に属すると思われるものも若干認められる。直接遺構に結びつくものではないが、この地区的当該期の資料を補完する意味で重要であると思われる。なお、遺構・遺物双方ともであるが、特に遺物については時間的な制約と報告者の浅見から充分な検討に至っていないものが多数あることを付言し、また反省点としたい。

中世におけるこの地域は倭文庄に該当するであることは第2章でも触れたが、今回の事業において発掘した位置は地勢的にみると倭文平野の中心部にあたる位置であると考えられる。文献的にみると、中世倭文庄は京都上賀茂神社領として文献に現れており、以後室町期に至るまで長く支配を受けている。

この地域における当該時期にかかる遺構の発掘調査は今回がはじめてであり、今後も継続的な資料の蓄積をはかっていくことが必要である。

参考・参照文献

- 高橋 澄「入門講座 弥生土器」考古学ジャーナル 1980年
近藤義郎編『岡山県の考古学』吉川公文館 1987年
「岡山県史」「古代II」岡山県史編纂委員会 1990年
平岡正宏「美作の古代末から中世の土器」「中世土器の基礎研究Ⅳ」日本中世土器研究会 1993年
松本武彦「鹿田遺跡における中世土師質小皿の検討」「鹿田遺跡3」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊 岡山大學埋蔵文化財調査研究センター 1993年
安川豊史「美作国府跡」「津市埋蔵文化財発掘調査報告50」津市教育委員会 1994年
中世土器研究会編「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社 1996年
山本悦世「岡山県南部における土師質鍋の変遷—中世前半期における鹿田遺跡の場合—」「鹿田遺跡4」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1997年
江見正己ほか「久田原遺跡 久田原古墳群」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告184」岡山県教育委員会 2004年
仁木康治「曾根田遺跡 半太遺跡 稲田遺跡 久保田遺跡」「久米町埋蔵文化財発掘調査報告」久米町教育委員会 2005年
江見正己ほか「久田原ノ内遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告192」岡山県教育委員会 2005年

表2 出土土器・土製品観察表

出典番号	遺構	種別	個体	計測値(cm)			色	調	焼成	施土と特徴	備考
				口径	底径	高さ					
1	せんご遺跡 遺物3	土器	小皿状部	-	4.6	-	黄土色	調	10~30mmの砂粒を含む		
2		土器	小皿状部	-	6.0	-	濃乳白色	調	10~30mmの砂粒を含む		
3	土壤6	陶器	碗?	9.0	-	-	乳白色	調			
4		陶器	近部	-	4.6	-	淡い灰褐色	調			
5	井3	施釉陶器	底部	-	5.0	-	内外面とも灰褐色	調	0.1mm程度の砂粒を多量含む		
6		土器	小皿	7.8	5.6	1.3	内外面とも黄土色	調	0.1~20mmの砂粒を少量含む		
7		土器	小皿	7.5	5.9	1.3	内外面とも茶色	調	0.1~5mmの砂粒を多量含む		
8		土器	小皿	7.6	5.2	1.4	内外面とも黄土色	調	0.1~3mmの砂粒を含む		
9		土器	小皿	7.4	5.6	1.2	内外面とも乳白色	調	0.1の砂粒を含む		
10		土器	小皿底部	-	5.6	-	内外面とも褐色	調	1mm程度の砂粒を含む		
11		土器	小皿	7.4	5.4	1.0	内外面とも濃い黄土色	調	1mm程度の砂粒を含む		
12		土器	小皿	-	5.3	-	内外面とも淡い橙色	調	0.1mm程度の砂粒を含む		
13		土器	小皿	8.4?	6.4	1.4	内外面とも褐色	調	1~2mm程度の砂粒を含む		
14		土器	小皿	8.8	5.4	2.0	内外面とも乳白色	調	1mm程度の砂粒を含む		
15		土器	小皿	7.8	4.8	1.2	内外面とも濃い茶色	調	0.1~3mm程度の砂粒を含む		
16		土器	小皿	8.2	5.3	1.6	内外面とも褐色	調	1~2mm程度の砂粒を含む		
17		土器	小皿	6.6	4.8	1.2	内外面とも赤茶色	調	0.1~2mmの砂粒を少量含む		
18		土器	小皿	7.4	5.4	1.6	内外面とも濃い乳白色	調	1~3mm程度の砂粒を含む		
19		土器	小皿	-	6.3	-	内外面とも赤茶色	調	1~3mm程度の砂粒を含む		
20	遺構外遺物	土器	小皿	-	5.3	-	内外面とも淡い橙色	調	0.1mm程度の砂粒を含む		
21		土器	小皿	7.8	6.0	1.7	内外面とも褐色	調	1mm程度の砂粒を含む		
22		土器	皿	11.0	6.4	2.0	内外面とも淡い黄土色	調	1~3mm程度の砂粒を含む		
23		土器	皿	10.9	6.4	1.8	内外面とも濃い黄土色	調	0.2mm程度の砂粒をわずかに含む		
24		土器	皿	10.0	4.8	1.8	内外面とも濃い黄土色	調	1mm程度の砂粒を含む		
25		土器	皿	9.8	3.1	2.4	内外面とも濃い灰褐色	調	1mm程度の砂粒を少量含む		
26		土器	皿	12.2	6.2	3.3	内外面とも褐色	調	2mm程度の砂粒を含む		
27		灰窓器	底部	-	5.2	-	内外面とも灰色	調	0.2~2mm程度の砂粒を含む		
28		土器	口縁部	-	-	-	内外面とも濃い灰褐色	調	1mm程度の砂粒を含む		
29		瓦質土器	L縁部	-	-	-	内外面とも濃い灰色	調	1~2mm程度の砂粒を含む		
30		土器	L縁部	-	-	-	内外面とも褐色	調	1~2mm程度の砂粒を含む		
31		瓦質土器	L縁部	-	-	-	内外面とも灰色	調	1~2mm程度の砂粒を含む		
32		瓦質土器	L縁部	-	-	-	内外面とも褐色	調	1~4mm程度の砂粒を含む		
33		瓦質土器	L縁部	-	-	-	内外面とも濃灰色	調	2mm程度の砂粒を含む		
34		灰窓器	L縁部	-	-	-	内外面とも濃灰色	調	1mm程度の砂粒を含む		
35		既生土器	L縁部	34.0	-	-	灰茶色	調	1~4mm程度の砂粒を多く含む		
36	昭和14年度 東京都立区 遺物	土器	皿	-	-	-	内外面とも乳白色	調	0.5mm程度の砂粒をわずかに含む		
37		既生土器	縁部	-	-	-	タケ色	調	0.5mm以下の乳白色砂粒を含む		
38		既生土器	縁部	-	-	-	丁子色	調	1mm程度の砂粒を多く含む		
39	土壤2	既生土器	L縁部	-	-	-	茶色	調	1mm以下の砂粒を多く含む		
40		土器	L縁部	-	-	-	茶色	調	0.5mm程度の砂粒をわずかに含む		
41		灰窓器	碗	15.8	6.7	5.4	内外面とも灰色	調	1~2mm程度の砂粒を含む		
42		土器	底部	-	3.8	-	内外面とも濃い乳白色	調	1mm程度の砂粒を含む		
43		土器	底部	-	5.7	-	内外面とも乳白色	調	1~3mm程度の砂粒を含む		
44		既生土器	L縁部	-	-	-	黄土色	調	0.2~3mm程度の砂粒を含む		
45	遺2	灰窓器	底部	-	6.3	-	内外面とも灰色	調	1~3mm程度の砂粒を含む		
46		灰窓器	底部	-	6.5	-	内外面とも褐色	調	1mm程度の砂粒をわずかに含む		
47	遺5	灰窓器	小皿L縁部	-	-	-	内外面とも暗灰色	調			
48		既生土器	L縁部	18.0	-	残存3.7	茶めの黄土色~灰めの黄土色	調	0.5mm程度の乳白色砂粒を少し含む		
49		既生土器	L縁部	17.2~21.6	-	残存4.8	茶めの茶色~茶めの黄土色	調	0.5~1.5mm程度の砂粒を含む		
50	昭和15年度 東京都立区 第1・第2	既生土器	L縁部	19.2~21.2	-	残存7.5	コルク色	調	0.5~1mm程度の乳白色砂粒を少し含む		
51		既生土器	L縁部	15.2~19.8	-	残存4.5	ベージュ色	調	0.5mm程度の白色砂粒を多く含む		
52		既生土器	L縁部	19.0~20.0	-	残存8.0	赤めの黄土色	調	1.0~20mm程度の乳白色砂粒を多く含む		
53		既生土器	L縁部	14.8	-	残存4.5	灰すき茶色	調	0.1~1mm程度の砂粒を多く含む		

54	出生土器	L縫部	230	-	残存 5.8	とび色	0.1 ~ 2mm 程度の砂粒を少し含む	
55	出生土器	L縫部	240	-	残存 7.5	赤茶色～黄褐色	0.5 ~ 1.5mm 程度の砂粒を多量に含む	
56	出生土器	L縫部	172	-	残存 7.1	暗めのレンガ色	0.1 ~ 2mm 程度の砂粒を含む	
57	出生土器	L縫部	280	-	残存 7.8	赤茶色	0.1 ~ 2mm 程度の乳白色砂粒を含む	
58	出生土器	L縫部	208	-	残存 4.1	T字茶色	0.2 ~ 4mm 程度の砂粒を含む	
59	出生土器	脚部	256	-	残存 21.0	コヨナ色～木枯茶	1mm 以下の砂粒を多く含む	
60	出生土器	脚部	144	-	残存 21.6	内外面とも丁字茶～長春色	20 ~ 25mm 程度の白色跡紋を多く含む	
61	出生土器	裏	-	4.8	残存 8.7	暗褐色～黒色	0.5 ~ 1.5mm 程度の砂粒を含む	
62	出生土器	底部	-	5.8	残存 9.7	保竹～東穂・桜色	0.5 ~ 1.5mm 程度の乳白色砂粒を含む	保付番
63	出生土器	底部	-	5.9	残存 19.0	灰茶色	0.1 ~ 1.5mm 程度の砂粒を多量に含む	
64	出生土器	底部	-	6.9	残存 12.7	柴色～暗茶色	0.5 ~ 5mm の白色砂粒を含む	
65	出生土器	底部	-	7.6	残存 7.2	墨色	0.5 ~ 1mm 程度の砂粒を多く含む	
66	出生土器	底部	-	6.4	残存 32	暗褐色	1mm 以下の乳白色砂粒を多量に含む	底部後成層母
67	出生土器	裏	群 8.9	-	高さ 24	灰黃色～灰黑色	1 ~ 1.5mm 程度の白色砂粒を多く含む	
68	出生土器	脚部	残存 11.5	残存 22.4	残存 13.0	牛糞色～柴色	1mm 程度の白色砂粒を多く含む	
69	出生土器	脚部	-	-	残存 4.1	梅茶色	0.1 ~ 1mm 程度の乳白色砂粒を多く含む	
70	出生土器	脚部	-	-	残存 7.0	白茶色	1mm 以下の乳白色砂粒を多量に含む	
71	出生土器	高杯杯部	170	-	残存 8.8	赤めの茶色	0.5 ~ 1.5mm の砂粒を若干含む	
72	出生土器	高杯杯部	212	-	残存 9.0	T字色～黒色	0.5 ~ 1.5mm の白色砂粒を若干含む	外間に黒度あり
73	出生土器	高杯杯部	19.4 ~ 23.8	-	残存 11.5	オリーブ灰～赤めの茶色	0.5mm ~ 1.5mm の砂粒を若干含む	
74	出生土器	脚部	-	12.0	残存 6.0	T字茶色	0.1mm ~ 1.5mm の砂粒を含む	
75	出生土器	脚部	-	9.8	残存 3.1	柴色	0.1mm ~ 1.5mm の乳白色砂粒を含む	
76	出生土器	脚部	120	-	残存 4.0	長春色～消淡色	0.1mm ~ 1mm の砂粒を多く含む	
77	出生土器	脚部	-	8.4	残存 4.0	牛糞色～柴色	0.5mm ~ 1mm の乳白色砂粒を多量に含む	
78	出生土器	脚部	-	30.0	残存 9.0	枯葉色	1mm 程度の乳白色砂粒を多く含む	
79	出生土器	脚部	-	18 ~ 20.6	残存 9.0	杏色	0.5mm ~ 1mm の白色砂粒を多量に含む	
80	出生土器	脚部	-	34.0	残存 11.3	バージュ～消淡色	0.1mm ~ 2mm の砂粒を多く含む	
81	出生土器	脚部	-	13.6	残存 27	T字～柴色	0.1mm ~ 2mm の乳白色砂粒を含む	
82	辺地東遺跡 15 年度 第 1・2 号区 第 1・2 号		L縫部	18.0 ~ 19.8	-	暗灰色～黄土色	0.5mm ~ 1mm の砂粒を少量含む	
83	出生土器	L縫部	162	-	残存 6.8	灰白色～灰白色	0.5mm 以下の乳白色砂粒を多く含む	
84	出生土器	L縫部	90	-	残存 8.0	茶みの茶色	1mm ~ 2mm の砂粒を含む	PP
85	出生土器	L縫部	230	-	残存 39	暗いオリーブ灰	0.5mm ~ 1mm の砂粒を多く含む	
86	出生土器	L縫部	198	-	残存 9.5	柴色～焦茶色	0.5mm ~ 1mm の乳白色砂粒を多量に含む	
87	出生土器	L縫部	190	-	残存 5.0	T字茶色	1mm 程度の乳白色砂粒を含む	
88	出生土器	L縫部	252	-	残存 7.6	茶みの灰茶色	0.5mm ~ 1mm の乳白色砂粒を多く含む	
89	出生土器	L縫部	210	-	残存 9.5	とび色	1mm 程度の乳白色砂粒をわずかに含む 0.5mm 以下の白色砂粒を少量含む	
90	出生土器	L縫部	140	-	残存 4.2	T字色	0.5 以下の白色砂粒を少量含む	
91	出生土器	L縫部	188	-	残存 4.1	コヨク色	0.5mm ~ 1.5mm 程度の乳白色砂粒を含む	
92	出生土器	L縫部	165	-	残存 5.0	とび色	0.5mm 以下の白色砂粒を含む	
93	出生土器	L縫部	260	-	残存 7.2	コルク色	0.5mm ~ 1mm の乳白色砂粒を少量含む	
94	出生土器	L縫部	218	-	残存 9.5	コルク色	0.5mm ~ 1.5mm の乳白色砂粒を少量含む	
95	出生土器	L縫部	186	-	残存 15.5	バージュ色	1mm 程度の乳白色砂粒を少量含む	
96	出生土器	L縫部	150	-	残存 52	灰色	1mm 程度の乳白色砂粒を含む	
97	出生土器	底部	-	8.0	残存 5.3	T字色	6.5mm 程度の石英をわずかに含む 1mm 程度の砂粒を少量含む	
98	出生土器	底部	-	5.2	残存 25	コヨク色	0.5mm ~ 1mm の乳白色砂粒を多く含む	
99	出生土器	底部	-	5.6	残存 4.0	T字色	0.3mm ~ 3mm の半透明乳白色砂粒を少 量含む	
100	出生土器	底部	-	8.2	残存 7.0	漆茶色	1mm ~ 3mm 程度の乳白色砂粒と微細砂 粒を多く含む	
101	出生土器	底部	-	9.0	残存 10.0	コヨク色	0.3mm ~ 3mm の砂粒を少量含む	
102	出生土器	高杯杯部	27.0	-	残存 6.5	赤香色	0.5mm ~ 1mm の砂粒を少量含む	保付番
103	出生土器	高杯杯部	18.0 ~ 20.8	-	残存 6.2	T字～石板色	1.5mm ~ 3mm の半透明乳白色砂粒と 0.5 ~ 1.5mm の白色砂粒を少量含む	
104	出生土器	高杯杯部～脚柱部	残存 20.0	-	残存 12.5	赤めの青褐	0.5mm 程度の白色砂粒を多く含む	
105	出生土器	脚部	-	3.7	残存 2.3	牛糞色	1mm 程度の白色砂粒を含む	
106	出生土器	脚部	-	9.6	残存 4.7	牛糞色	1mm 以下の乳白色砂粒を多く含む	
107	出生土器	脚部	-	22.4	残存 10.0	赤めの黄土色	1mm ~ 3mm 程度の砂粒を多く含む	
108	出生土器	脚部	-	15	残存 14.0	牛糞色	0.5mm ~ 1mm の乳白色砂粒を多く含む	

109	礫文土器	L3縁部	-	-	-	丁字茶色	0.5mm ~ 25mm の砂粒を多量に含む	
110	礫文土器	L3縁部	-	-	-	灰めのベージュ色	0.5mm ~ 1.5mm の砂粒を多く含む	
111	分離粘土製品	-	幅4.2	横5.2	厚さ1.1	朱色	1.0mm 程度の砂粒を多量含む	
112	分離粘土製品	-	幅3.6	横3.7	厚さ1.4	うす茶色	0.1mm 程度の砂粒をわずか含む	
113	15年度茶	分離粘土製品	-	幅4.3	横8.1	厚さ1.8	丁字色	0.5mm 以下の白色砂粒を含む
114	調査1 - 調2	土質粘土質	-	幅6.5	横6.3	厚さ2.7	朱色	0.5mm 以下の白色砂粒を多量に含む
115	土質粘土質	-	幅5.5	横4.6	厚さ1.7	赤茶色～灰赤～暗褐色	1mm 程度の砂粒を若干含む	
116	土質粘土質	-	幅5.7	横5.8	厚さ0.9	灰茶色～暗褐色	0.5 ~ 1mm 程度の砂粒を多量に含む	
117	泥生土器	L3縁部	-	-	-	黄土色	1 ~ 3mm 程度の砂粒を含む	外面に削目文
118	泥生土器	L3縁部	-	-	-	茶褐色	0.1 ~ 4mm 程度の砂粒を含む	
119	泥生土器	L3縁部	-	-	-	法い肌色	細かい砂粒を多量に含む	上面に擦傷淡状文
120	泥生土器	L3縁部	-	-	-	こげ茶色	細かい砂粒を多量に含む	
121	土師器	小皿	7.4	5.4	1.3	赤茶色	1mm 程度の砂粒を含む	
122	磁器器	底部	-	6.8	-	白灰色	1 ~ 2mm 程度の砂粒を含む	
123	泥生土器	L3縁部	-	-	-	くすんだ茶色	1mm 程度の砂粒を多量に含む	
124	泥生土器	L3縁部	-	-	-	赤茶色	2mm 程度の砂粒を含む	外面に5条の凹線
125	泥生土器	L3縁部	-	-	-	乳色	1 ~ 2mm 程度の砂粒を含む	外面に2条の凹線
126	泥生土器	L3縁部	-	-	-	赤茶色	1mm 程度の砂粒を含む	外面に二連の削目文
127	泥生土器	L3縁部	-	-	-	薄いオレンジ色	1mm 程度の砂粒を含む	
128	泥生土器	L3縁部	-	-	-	茶褐色	0.1 ~ 2mm 程度の砂粒を含む	外面に3連の削目文
129	泥生土器	L3縁部	-	-	-	濃い黄土色	1 ~ 3mm 程度の砂粒を多量含む	外面に削目文
130	泥生土器	L3縁部	-	-	-	濃い黄土色	1mm 程度の砂粒を多く含む	
131	泥生土器	L3縁部	-	-	-	濃茶色	0.1 ~ 1mm 程度の砂粒を含む	
132	泥生土器	L3縁部	-	-	-	茶色	1mm 程度の砂粒を含む	外面に凹線
133	泥生土器	L3縁部	-	-	-	濃い黄土色	1mm 程度の砂粒を含む	
134	泥生土器	盤部	-	-	-	茶褐色	0.2 ~ 2mm 程度の砂粒を含む	
135	泥生土器	裏L3縁部	21.8	-	-	茶褐色	1 ~ 2mm 程度の砂粒を含む	
136	泥生土器	裏L3縁部	157	-	-	茶褐色	1 ~ 3mm 程度の砂粒を含む	
137	磁器器	小皿	2.6	3.8	1.6	内外面とも青灰色	1mm 程度の砂粒を含む	
138	磁器器	底部	-	5.8	-	内外面とも灰白色	2mm 程度の砂粒を含む	
139	土師器	L3縁部	-	-	-	内外面とも青色	1mm 以上の白色砂粒を含む	ビット
140	瓦質土器	L3縁部(黒)	-	-	-	内外面とも灰の粉色	0.5mm 程度の砂粒を含む	ビット
141	遺構外遺物	磁器器	陶L3縁部	13.0	-	内外面とも灰白色	多量の砂粒を含む	
142	泥生土器	L3縁部	-	-	-	粉茶色	1mm 程度の乳白色砂粒を少し含む	
143	泥生土器	L3縁部	-	-	-	丁字茶色	0.5 ~ 1mm 程度の長石を少し含む	
144	泥生土器	L3縁部	-	-	-	丁字色	1mm 程度の乳白色砂粒を少し含む	
145	泥生土器	L3縁部	-	-	-	らぐだ色	1mm 程度の白色砂粒を含む	外面に連續削目日本削溝文、上面に塊状浮文
146	泥生土器	L3縁部	-	-	-	粉茶色	0.5 ~ 1mm 程度の白色砂粒を含む	
147	泥生土器	盤部	-	-	-	粉茶色	0.1 ~ 2mm 程度の砂粒を少量含む	外面に3条の凹線
148	泥生土器	裏L3縁部	31.0	-	残存高9.8	素色	1mm 程度の乳白色砂粒を少量含む	
149	泥生土器	裏L3縁部	24.0	-	残存高8.0	こげ茶色	0.5 ~ 1mm 程度の砂粒を少量含む	
150	磁器器	底部	-	5.6	-	内外面とも銀ねず色	精良	
151	土師器	小皿底部	-	6.4	-	内外面とも朱分色	精良	
152	土師器	小皿	9.5	6.1	1.3	内外面ともレンガ色	1 ~ 3mm 程度の砂粒を含む	
153	土師器	小皿底部	-	5.8	-	内外面ともレンガ色	2mm 程度の砂粒を含む	
154	磁器器	底	15.3	5.2	5.7	内外面とも濃灰白色	1mm 程度の砂粒を少量含む	
155	磁器器	陶底部	-	5.2	-	内外面とも灰白色	1 ~ 2mm 程度の砂粒を含む	
156	磁器器	陶底部	-	4.6	-	内外面とも朱分色	軌貫 1 ~ 3mm 程度の砂粒を含む	
157	磁器器	底部	-	5.7	-	内外面とも朱分色	軌貫 1 ~ 3mm 程度の砂粒を含む	
158	磁器器	底部	-	5.9	-	内外面とも青灰色	精良	
159	磁器器	底部	-	5.6	-	内外面とも朱分色	1mm 程度の砂粒を含む	
160	磁器器	小皿	7.9	5.0	1.5	内外面とも灰白色	1mm 程度の砂粒を少量含む	
161	土師器	蓋	12.7	-	残存高18.5	丁字色～コルク色	やや軌 1.5 ~ 3mm 程度の砂粒を大量に含む	

写 真 図 版

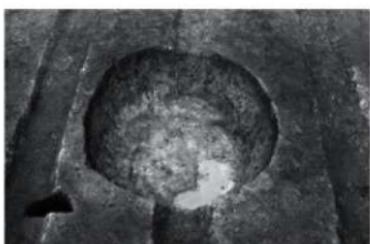
せんご遺跡



せんご遺跡遺景（北から）



土壤1（検出状況）（南から）



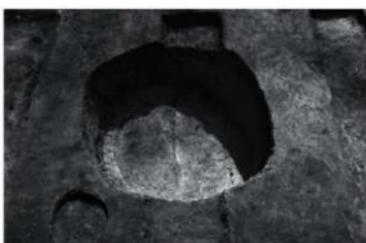
土壤2（北から）



土壤3（北から）



土壤4（北西から）



土壤5（南から）

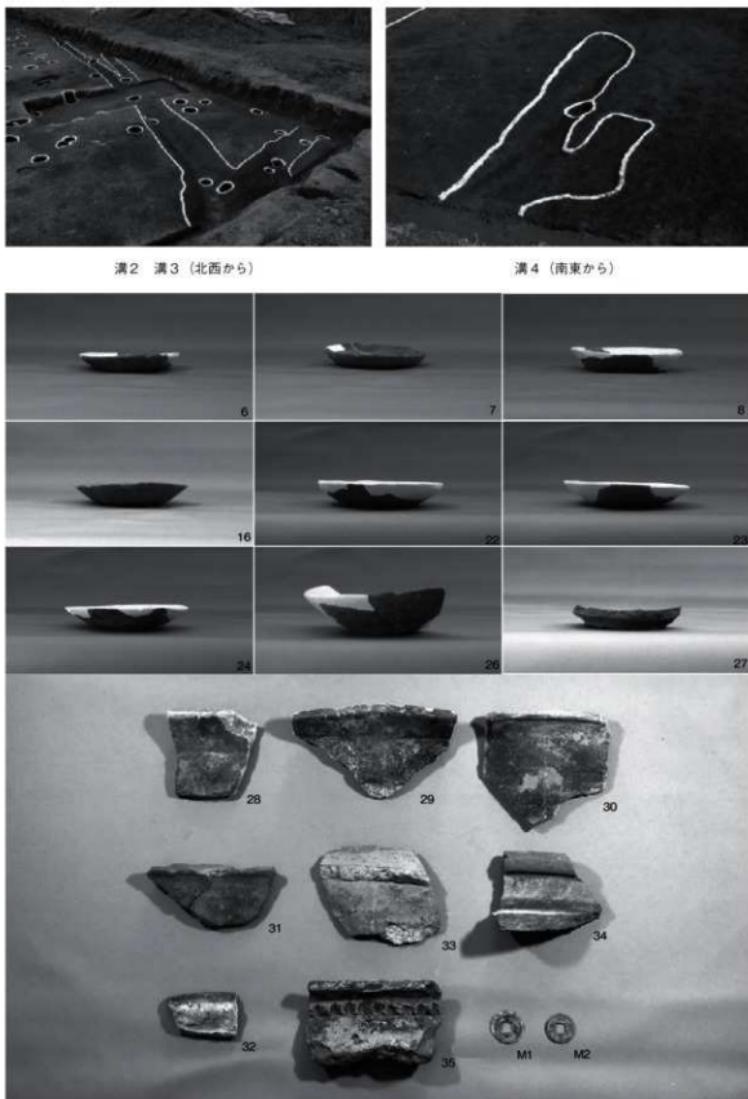


土壤6（北から）



土壤7（南東から）

せんご遺跡



せんご遺跡出土遺物

隠地東遺跡 14年度調査区、15年度東調査区



隠地東遺跡遠景（北西から）



土壤1（北東から）



土壤2（南から）



土壤3（西から）



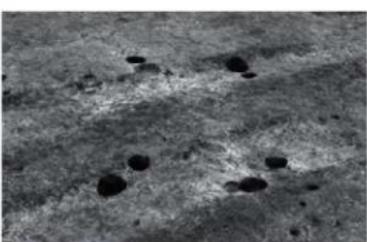
土壤4（北東から）



不明遺構（南西から）



調査状況（3区）（東から）



建物1・2（北から）

隠地東遺跡 15年度東調査区



土壤（東から）



溝3（東から）



溝4（北東から）



溝5（北から）



溝6（東から）



溝7（北西から）

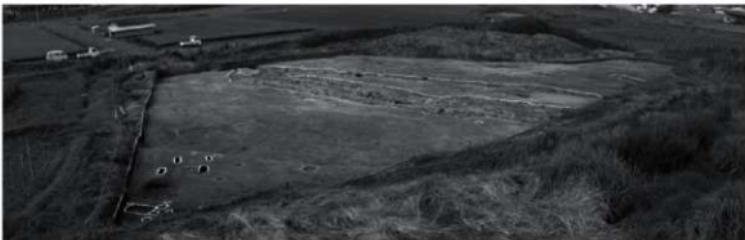


溝8（南から）



調査状況（西から）

隠地東遺跡 15年度西調査区



西調査区全景（南から）



土壤1（北東から）



土壤2（西から）



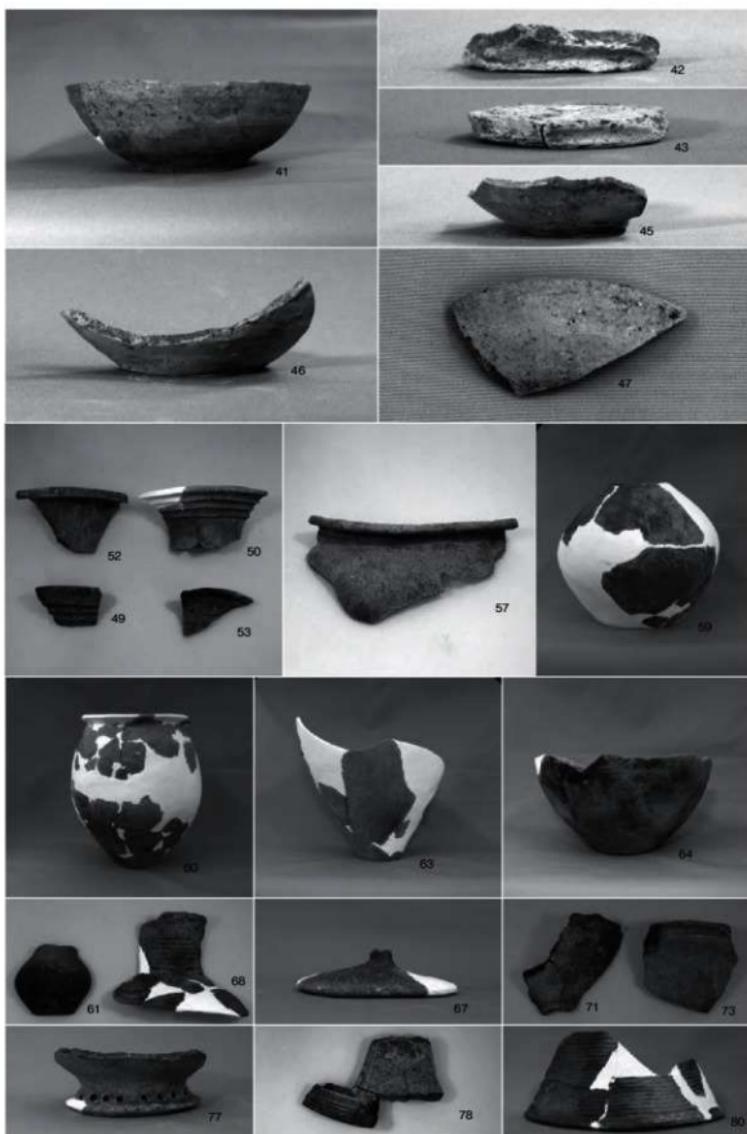
土壤3（北西から）



土壤4（北東から）



方形ピット（北東から）



図版 東道路出土遺物 (1)



図版 東道跡出土遺物（2）

報告書抄録

印 刷 仕 様

紙 質 表紙	アートポスト	220 kg
本文	ニューエイジ	90 kg
D T P O S	Windows X P Professional	
DTP	Adobe Indesign 202J	
図版作成	Adobe Illustrator CS	
写真調整	Adobe Photoshop CS	
Scanning	35 mm・6×7・4×5film EPSON GT-X 700	
	図面類	GRAPHTEC IMAGESCANNER TS7000
使用 Font モリサワ	OpenType 基本 7 書体 (じゅん Pro、リュウミン ProL-KL、見出ゴ MB31Pro、見出ミン MA31Pro、太ゴB 101Pro、太ミン A101Pro、中ゴシック BBBPro)	
画像原稿 階調画像線数は 175 線		

せんご遺跡 隠地東遺跡 津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 77 集

2006 年 3 月 31 日 発行

発行 津山市教育委員会
津山弥生の里文化財センター
〒 708-0824
岡山県津山市沼 600-1
TEL0868-24-8413 FAX0868-24-8414
印刷 津山朝日新聞社
